

石川県埋蔵文化財情報

第 39 号

巻頭図版（松梨遺跡、園町遺跡、八日市地方遺跡、大領遺跡）

平成29年度上半期の発掘調査から …………… 調査部長 垣内光次郎 …… (1)

発掘調査略報

松梨遺跡（小松市）…………… (2)

園町遺跡（小松市）…………… (4)

八日市地方遺跡（小松市）…………… (8)

大領遺跡（小松市）…………… (12)

島遺跡（小松市）…………… (14)

塔尾遺跡（加賀市）…………… (17)

大菅波コショウズワリ遺跡（加賀市）…………… (18)

平成29年度上半期の出土品整理作業 …………… (20)

平成29年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 …………… (23)

はじめに …………… 所長 藤田邦雄 …… (23)

越前における15～16世紀中葉の土器皿 …………… 阿部 来 …… (24)

近世前半期越前のカワラケの諸様相—福井城跡出土資料から— …………… 中原義史 …… (29)

加賀における近世成立期の土器様相 …………… 立原秀明 …… (34)

金沢城跡の土師器皿—16世紀後半～17世紀前半— …………… 滝川重徳 …… (37)

能登における15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿の様相 …………… 岩瀬由美 …… (41)

富山県（富山城跡・富山城下町遺跡主要部）の様相 …………… 堀内大介 …… (44)

資料検討会 …………… 白田義彦 …… (47)

調査研究

小松市園町遺跡と大領遺跡における自然科学分析

……………能城修一、山本直人、小岩直人、安中哲徳、増永佑介、白田義彦 …… (48)

2018年 5 月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

松梨遺跡

遺跡遠景（南西から）

松梨遺跡は、小松市北部に広がる広大な集落遺跡で、梯川下流に八丁川が合流する地点の約1 km北側の沖積低地に立地する。北陸新幹線建設に先立つ調査で、昨年度に引き続き、弥生時代から近世にかけての集落跡を確認した。

C区遠景（北東から）

C区北東端部では古代の自然河川を検出し、河川以南では古代末から中世にかけての掘立柱建物や古墳時代の溝を確認した。



遺跡遠景（南西から）



C区遠景（北東から）

写真解説

松梨遺跡

E区俯瞰

E区では調査区のほぼ全域で中世の掘立柱建物や井戸、竪穴状遺構を密集して検出した。E区南西端部、及びF区北東端部で平行する溝を確認しており、中世集落の南端を区切る区画溝と推定される。

D区井戸枠出土状況（東から）

D区では中世の縦板組の井戸を2基検出し、いずれも水溜として曲物が底面近くに設置されていた。



E区俯瞰



D区井戸枠出土状況（東から）

写真解説

園町遺跡

調査区遠景（北から）

園町遺跡は、JR小松駅より北に約2 km、梯川左岸より南に約150 mの市街地縁辺に広がる新たに発見された遺跡である。北陸新幹線（加賀・敦賀間）高架橋工事に先立ち調査を行い、弥生時代と中世の集落遺跡を確認した。

Ⅳ区 環濠と墓域（南東から）

調査区南端のⅣ区では、環濠と墓域を検出した。周溝を共有した方形周溝墓が少なくとも4基以上みられる。弥生時代中期の環濠集落の南側に墓域が広がっていたと推定される。



調査区遠景（北から）



IV区 環濠と墓域（南東から）

写真解説

八日市地方遺跡

C-1区全景（北東から）

八日市地方遺跡は、北陸を代表する弥生時代中期の大規模環濠集落である。居住域の発掘調査では、柱穴や大小の土坑、溝などの遺構が複数の遺構と切り合い、足の踏み場のない程に密集する状況を確認した。

割り抜き材を使った井戸（北西から）

C-1区の居住域内で検出した井戸で、板と組み合わせて割り抜き材を使用しているが、全周の1/3～1/4のみを使用していたものとみられる。古い井戸を西側に作り替えたものとみられ、古い井戸の上に半切材を並べ足場としていた。



C-1区全景（北東から）



割り抜き材を使った井戸（北西から）

写真解説

八日市地方遺跡

川跡の調査風景（南東から）

C区の南端で確認した、集落を東西に貫流する川跡。調査区内では深さ約2 mまでを確認したが、何層にもわたる堆積層には大量の遺物が含まれる。川岸には祭祀空間、貯木施設、貝塚、貯蔵穴などがあり、様々な生活の場面が目に浮かぶ。

川岸から見つかった貝塚（南から）

シジミやカキを主体とした小規模な貝塚からは、コイ科やタイ科の魚骨や鱗などのほか、イノシシ、ニホンジカ、イヌなどの獣骨や、イネ、メロン類、堅果類などの種実なども出土しており、弥生人の豊かな食生活の解明につながる。(写真右端はイノシシの頭蓋骨)



川跡の調査風景（南東から）



川岸から見つかった貝塚（南から）

写真解説

八日市地方遺跡

川跡からの遺物出土状況（東から）

C区の南端で確認した、集落を東西に貫流する川跡からは、農具をはじめとする大量の木製遺物やその未成品、粗割りされた木材などのほか、土器や玉作り関連遺物などが出土した。

また、岸辺にはトチ、クリ、ドングリなどの貯蔵穴も確認した。(写真の左側にトチの貯蔵穴)

川岸から見つかった貯木施設（南から）

杭と枝材を馬蹄形に組み合わせた貯木施設。施設内から泥除けの未成品が出土しているが、製作途中の製品や粗割りした材料などの乾燥を防ぐ保管施設と考えられ、集落内で木製品の生産が盛んに行われていたことが窺われる。



川跡からの遺物出土状況（東から）



川岸から見つかった貯木施設（南から）

写真解説

八日市地方遺跡

柄付き鉄製鉈^{やりざん}（実物大）

全長16.3cm、木製の柄が完存する弥生時代中期前半（約2,300年前）の鉄製鉈。日本列島で鉄器の生産が始まる以前に大陸からもたらされた「舶載鉄器」で、鉄器が列島各地へ波及していく過程を考えるうえで、極めて重要な資料である。

石製装身具出土状況

山間部の碧玉産出地から運ばれた原石は、この集落内で管玉などに加工され、列島各地へ運ばれた。生産地であるこの場所で、すでにヒスイの玉と一連になった装身具も出土しており、注目される。

今回の調査では、100点を超える管玉のほか、管玉の未成品や原石、ヒスイ勾玉の未成品や原石も出土しており、玉作りが盛んに行われていたことが窺われる。



柄付き鉄製鉞やりがんな（実物大）



石製装身具出土状況

写真解説

大領遺跡

遺跡遠景（南西から）

遺跡は、木場潟の北側約500mの小松市大領町と今江町の境に所在し、東側約200mには県指定史跡の浅井畷古戦場が存在する。南西側の栗津駅方向から北側の小松駅方向にゆるやかに屈曲しながら伸びる砂丘上の東側縁辺部、現在の海岸線からは約5km内陸部の標高1～2m代に立地している。

古代と中世の道路遺構全景（上空・東から）

調査の結果、古代（奈良・平安時代）と中世（鎌倉・室町時代）の2つの道路遺構を約30m離れた場所で確認した。道路の路面は後世の耕地整理により削平されていたが、どちらも両側に側溝を持つ。出土遺物からは、古代の道路遺構は、9世紀初頭頃、中世の道路遺構は、16世紀後半頃には機能していたと考えられる。

他に、古代～中世の畝溝や水路状の溝、近世の水路状の溝などの遺構を検出した。また、遺構検出面である砂層の上面からは、縄文時代後期（約3,000～4,000年前）頃の土器や石器が出土した。



遺跡遠景（南西から）



古代と中世の道路遺構全景（上空・東から）

写真解説

大領遺跡

中世の道路遺構と路面幅（南西から）

中世の道路遺構は、T字の水路状の溝が埋まった後につくられている。現況で上幅約40～80cm、深さ約25～40cm、断面U字形やV字形の側溝を両側に持つ。側溝の路面幅は約7mを測り、延長約30m分を直線状に検出している。北から東へ約55度傾いた角度で伸びており、北東方向へ延長させると、浅井畷古戦場の西側を通り、反対に南西方向に延長させると御幸塚城（今江城）跡の東側を通ることから、慶長五（1600）年に徳川方の前田利長と豊臣方の丹羽長重との間で起きた、「浅井畷の戦い」との関連も想定される。

古代の道路遺構と路面幅（南西から）

古代の道路遺構は、現況で上幅約1～1.5m、深さ約35～50cm、断面逆台形やV字形の側溝を両側に持ち、土層の堆積から掘り直しの痕跡がみられる。側溝の路面幅は約8mを測り、延長約30m分を直線状に検出している。道路遺構は北から東へ約60度の角度で伸び、北東方向へ延長させると小松市古府町の加賀国府（823年立国）や国分寺推定地周辺を通る。反対に南西方向に延長させると今江潟と木場潟間の砂州上を通り、柴山潟の東側に通じている。

これまで石川県内で確認された古代北陸道とみられる道路遺構は、奈良時代には路面幅7.5～8.5mであり、大領遺跡の道路遺構と同規模であることから、これまで南加賀でみつかったいなかった内陸部の経路を通る、「古代北陸道」であった可能性が考えられる。



中世の道路遺構と路面幅（南西から）



古代の道路遺構と路面幅（南西から）

平成29年度上半期の発掘調査から

調査部長 垣内光次郎

平成29年度は、石川県教育委員会から13件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省3件、鉄道・運輸機構7件、県土木部等3件で、本号においては平成29年4月から10月にかけて実施した7遺跡の発掘調査の概要を紹介する。

松梨遺跡（小松市）では、調査区の北部で検出した古代の河道から、墨書土器を含む土器群が出土した。また、南部のD・E区では、鎌倉から室町時代の掘立柱建物や井戸、竪穴状遺構が溝で区画された範囲に高密度に検出されたことから、長期にわたり営まれた中世の屋敷地と推定している。園町遺跡（小松市）は、梯川左岸の低地で発見された弥生時代と中世の複合遺跡である。中世の井戸や掘立柱建物が標高1.2～1.4mの砂丘上に展開しており、その遺構面の下から弥生時代中期の環濠と方形周溝墓などを検出したことで、南方約2kmに所在する八日市地方遺跡との関連が注目された。

八日市地方遺跡（小松市）は、北陸地方を代表する弥生時代中期の環濠集落で、平成27年度から北陸新幹線建設に伴う発掘調査を継続した。本年度のC調査区は、遺跡の中央を流れた河川（埋積浅谷）の右岸にあたり、川跡からは土器や木器を中心に玉作り遺物、骨角器など多彩な出土品がみられた。なかでも、木製品には農具や工具、容器、祭祀具、編組物に加えて、製品加工に利用した「柄付き鉄製鉋」の出土があり、弥生時代に普及した鉄器文化や発展した木工文化など、北陸の弥生文化の解明につながる貴重な資料があった。

大領遺跡（小松市）と島遺跡（小松市）は、木場潟の西岸に位置する古代の遺跡である。とくに大領遺跡で確認した古代と中世の二つの道路遺構は、加賀の古代官道や戦国時代の交通路の復元につながる重要な発見である。

大菅波コショウズワリ遺跡（加賀市）は、前年度調査区の北側区域を対象とした。調査区中央の河道は、前年度に続く沢状の地形で、その両岸の緩斜面で古墳時代後期から平安時代の掘立柱建物、井戸、波板状凹凸がある道路状遺構を確認している。塔尾遺跡（加賀市）は、動橋川の中流域に位置する縄文時代中期と室町時代の集落遺跡である。東方の丘陵上に所在する塔尾超勝寺跡は、戦国期に加賀の一向勢力を担った超勝寺の跡地と伝えられ、室町時代の遺跡はその門前であった可能性が高い。

平成29年度発掘調査遺跡

No	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	時代	関係機関	関係事業		
1		庄・西島遺跡、津波倉院寺	加賀市庄町他	10,000	古墳～古代	国土交通省	一般国道8号改築（加賀拡幅）		
2		寺境タブ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市本江町、酒井町	5,600	古代～中世		一般国道159号改築（羽咋道路）		
3		一針C遺跡	小松市一針町	3,480	弥生～中世		梯川改修		
4	○	松梨遺跡	小松市松梨町	3,500	弥生～近世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設		
5	○	園町遺跡	小松市園町	1,280	弥生～中世				
6	○	八日市地方遺跡	小松市土居原町	1,240	弥生				
7	○	大領遺跡	小松市大領町	1,960	縄文～近世				
8	○	島遺跡	小松市島町	1,920	古代～中世				
9		八日市遺跡	加賀市八日市町	3,290	弥生～古墳				
10	○	大菅波コショウズワリ遺跡	加賀市大菅波町	3,370	古墳～近世			土木部	地方道改築 主要地方道山中伊切線
11	○	塔尾遺跡	加賀市塔尾町	2,000	縄文、中世				地方道改築 主要地方道金沢田鶴浜線（のと里山海道）
12		柳田猫ノ目遺跡	羽咋市柳田町	640	弥生～中世				
13		金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）	金沢市出羽町	1,180	近世			企画振興部	東京国立近代美術館工芸館移転整備
	7件	13件		39,460					

まつ なし 遺 跡 松 梨

所在地 小松市松梨町・犬丸町地内
調査面積 3,500㎡

調査期間 平成29年4月17日～平成29年8月17日
調査担当 岩瀬由美、水田 勝、舘 直人、
川名 俊、加藤江莉



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・松梨遺跡では弥生時代～近世にかけての遺物が出土した。
- ・C区北東端部で自然河川を検出した。
- ・C区自然河川以南からE区にかけて、古代末～中世の掘立柱建物や井戸を多く検出した。
- ・G区では主に近世以降の溝を検出した。

松梨遺跡は松梨町、蛭川町、犬丸町にまたがる広大な遺跡で、梯川下流に八丁川が合流する地点の約1 km北側に立地する。北陸新幹線建設工事に伴い、昨年度の蛭川町に続き、今年度は松梨町・

犬丸町地内の調査を行った。これにより、遺跡の北端部から南端部までを調査区が細長く縦断したことになり、地点によって異なる遺跡の様相が明らかになってきた。

C区北東端部では古代の自然河川を検出した。この河川は平成3年度に行われた小松市教育委員会の調査区で確認された河川の続きと判断された。北岸は調査区外に位置しており確認できなかったが、河幅が17m以上あると推測できる。この河川からは多量の土器、木製品のほか、南東部を中心に墨書土器が多く出土した。また、底直上には長大な自然木が倒れた状態で出土した。河川は南岸から徐々に埋まっていき、完全に埋没した平安時代末以降に掘立柱建物が建てられ、居住域へと変化した。河川以南では総柱の掘立柱建物を重複して数棟確認したが、これらは河川上面まで伸びていないことから、河川が規模を縮小しつつも何らかの機能を残していた時期の建物と判断された。

C区南端部付近からD・E区にかけては、鎌倉～室町時代の井戸や竪穴状遺構、掘立柱建物を密に確認した。特にE区においては遺構の重複が激しく、連綿と生活を営み続けたことが判明した。E区では柱穴が密集するエリアが南北に2箇所あり、調査区南西端部に走る東西溝以南には柱穴が確認されないことから、屋敷地を区画する溝と判断された。この溝と平行関係にある溝をF区北東端部で確認しており、二重の溝で囲まれていたことが想定できる。これらの溝は西側がいずれも途切れており、出入口に当たる可能性が高い。なお、E区中央付近の東端部では火葬骨が出土した円形土坑を検出したほか、隅丸長方形を呈する土坑を数基確認したことから、東方の調査区外に墓域が広がっていることが推定される。

F区中央部以南からG区にかけては、散発的に弥生時代～古墳時代頃とみられる土坑、小穴を確認した以外は、近世以降の区画溝などを検出したに留まる。遺跡範囲の南端に向かって遺構密度が薄くなっていく様相を確認できた。

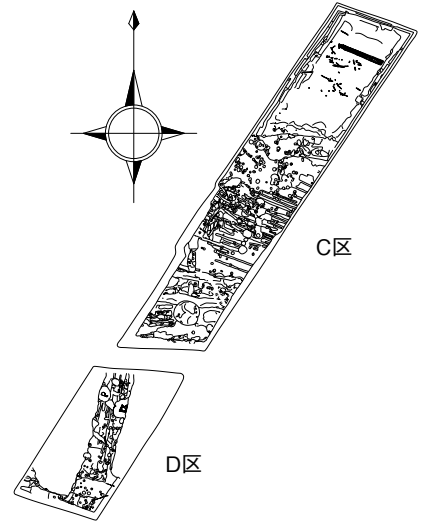
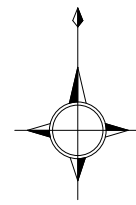
(岩瀬由美)



C区遺物出土状況

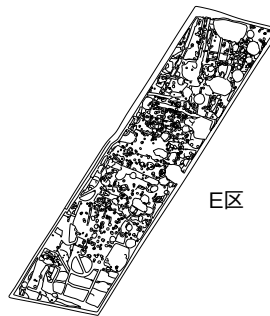


E区曲物出土状況



C区

D区



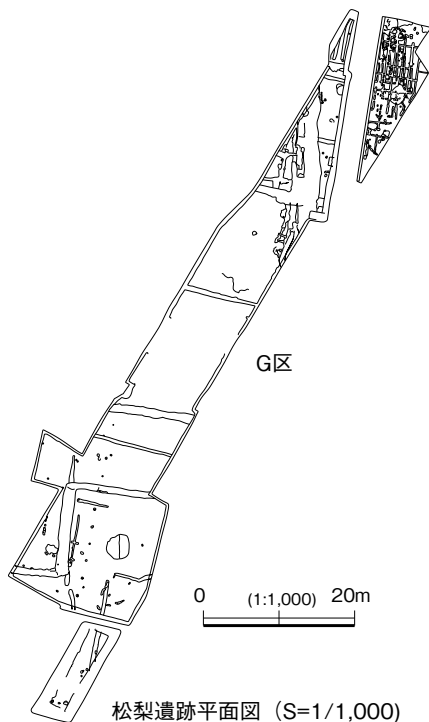
E区



F区



F区遺物出土状況



G区

0 (1:1,000) 20m

松梨遺跡平面図 (S=1/1,000)

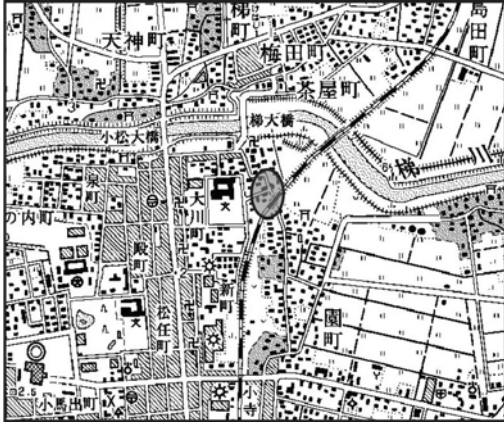


G区区画溝

その園町遺跡

所在地 小松市園町地内
調査面積 1,280㎡

調査期間 平成29年4月12日～7月31日
調査担当 白田義彦、増永佑介



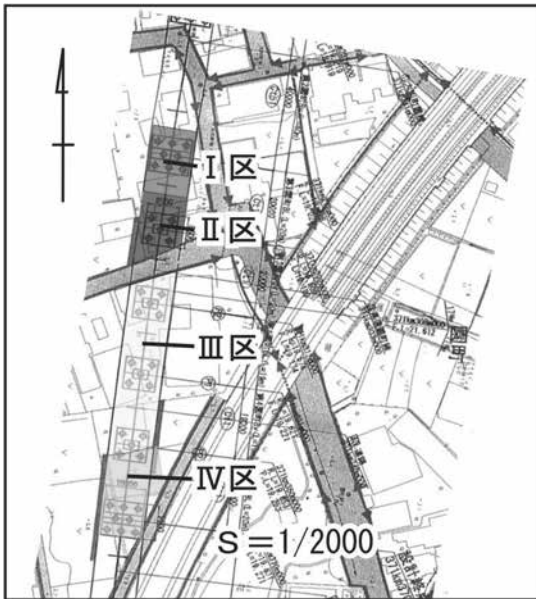
遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代中期の環濠集落と墓域、中世の集落を確認した。
- ・ 弥生時代中期の環濠、溝、方形周溝墓を検出し、環濠から大量の弥生土器が出土した。
- ・ 中世の掘立柱建物、竪穴建物、井戸、溝などを検出した。

園町遺跡は、JR小松駅より北に約2km、梯川左岸より南に約150mの市街地縁辺に広がっている。北陸新幹線(加賀・敦賀間)高架橋工事に伴い新たに発見された遺跡であり、東西約10～15m、南北約110mの範囲にわたり北から南にⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区と設定し調査を行った。調査の結果、遺跡はかつて標高約1.2～1.4mの砂層に立地し、後世の削平や宅地造成などの影響を受けていたが、弥生時代中期の環濠集落と墓域、中世の集落を確認した。

弥生時代の遺構は、方形周溝墓群、環濠、溝などを検出した。方形周溝墓群は、調査区南端のⅣ区で検出し、周溝を共有した方形周溝墓が少なくとも4基以上で構成される。1基の規模は墳丘長辺で約4～6.5mある。後世に削平されたため埋葬部は残存せず、周溝のみを検出した。周溝は四隅が途切れるものが多く、摩滅した弥生土器片が少量出土した。環濠は、Ⅰ区からⅣ区にかけて南北に縦断する環濠1とⅣ区で東西に横断する環濠2があり、Ⅳ区でT字状に合流する。規模は、幅約3～4mで、深さ約0.6～1.0m(溝底標高約0.3～0.7m)であり、環濠1は北から南に傾斜し、環濠2は東から西に傾斜する。土層断面から、両環濠はほぼ同一の箇所を掘り直しが行われているが、とりわけⅠ～Ⅱ区の環濠1は西側の環濠が東側の環濠を切っている。Ⅳ区の溝(SD40)は、環濠2が中世の溝に切られており、上層から弥生時代後期の土器が出土したことから、環濠2の上に続いていた可能性がある。なお、今回の調査区内で環濠集落の居住域に相当



調査区割図



Ⅳ区 方形周溝墓(西から)



III区 環濠1 掘削作業 (南から)



II区 環濠1 上層(新) 遺物出土状況 (南から)



II区 環濠1 (古) 土層断面 (南から)



III区 環濠1 土層断面 (北西から)

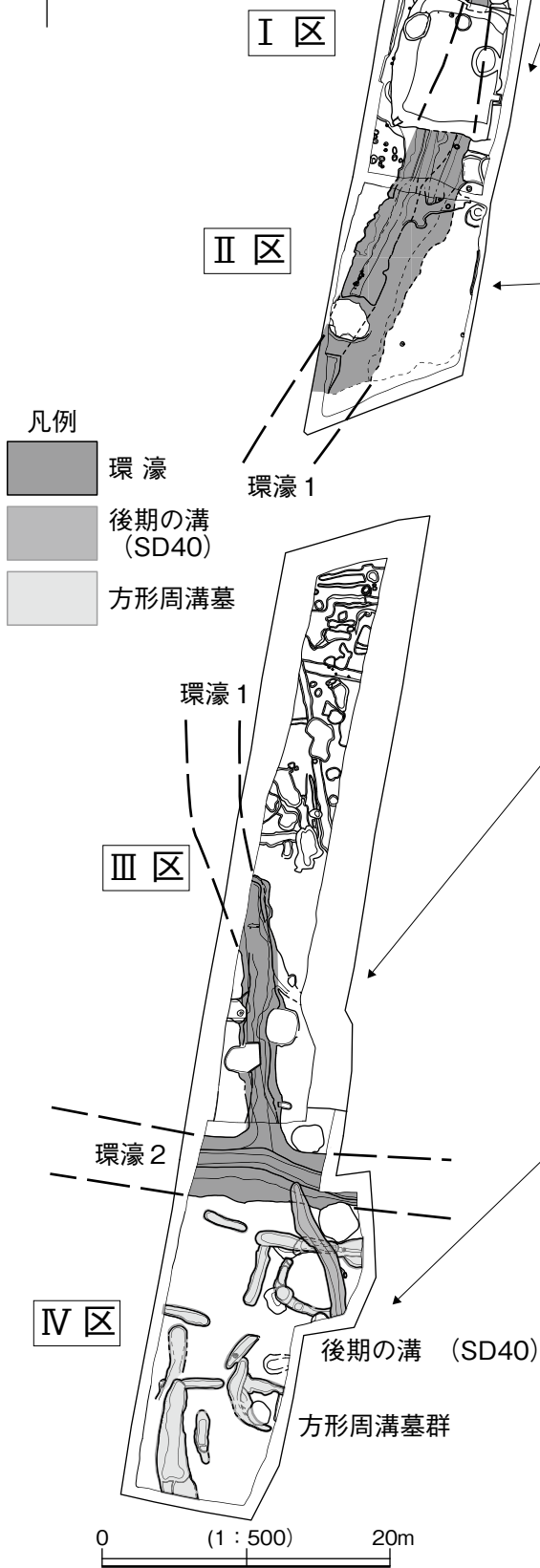
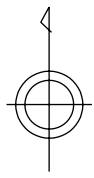
する箇所は存在しない。弥生時代の遺物は、弥生土器、玉作りに伴う緑色凝灰岩の剥片などが出土し、数量にしてテンバコ約65箱分である。これらのうちの多くが環濠から出土した中期の土器で占める。そして、この弥生土器は、南に約2 kmにある弥生時代中期の大規模環濠集落で知られる八日市地方遺跡ようかいちじかたの5～7期に相当し、これにより本遺跡が北陸地方で初期の環濠集落の事例であるといえる。

中世の遺構は、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、溝などを検出した。掘立柱建物は、規模が1間×2間や、2間×3間、3間×7間などであり、およそ南東ないし北西に長軸がある。柱穴はやや不規則に並び、柱根が残存していない。IV区には掘立柱建物群と思われる箇所があり、建物の建て替えが行われていた。井戸は、縦板組隅柱横棧留で水溜が曲物のものが僅かにみられ、井戸側が無いが曲物の水溜が残存するものが多くみられた。中世の遺物は、土師皿、珠洲焼、青磁などが出土し、土師皿が多く、陶磁器が少ない。時期は13～14世紀を主体とする。

また、調査区北端のI区で、幅約9 m、延長約8 m、深さ約1.3 m (溝底標高約0.25 m) の堀状の遺構を検出した。遺構は調査区外の東に伸び、中世面から切り込むものの、本来の切り込み面かどうか確認できなかった。加えて、遺構は近世の井戸に切られており、底から中世の遺物が出土した。これらのことから、遺構が少なくとも中世から近世にかけて掘られ、運河、区画などの性格・機能も他に考えられる。

今後の課題として、弥生時代では環濠の掘削時期の確定や玉作りに関連する遺物を整理する必要がある。また中世では掘立柱建物や井戸を検討し集落構造を把握する必要がある。それらを踏まえて、園町遺跡を、八日市地方遺跡や梯川周辺の弥生時代の遺跡、梯川流域の開発に関連した中世の遺跡と比較していくことで、地域における園町遺跡の位置づけなどを考えていきたい。

(増永佑介)



I 区 環濠 1 (南東から)



II 区 環濠 1 (南西から)

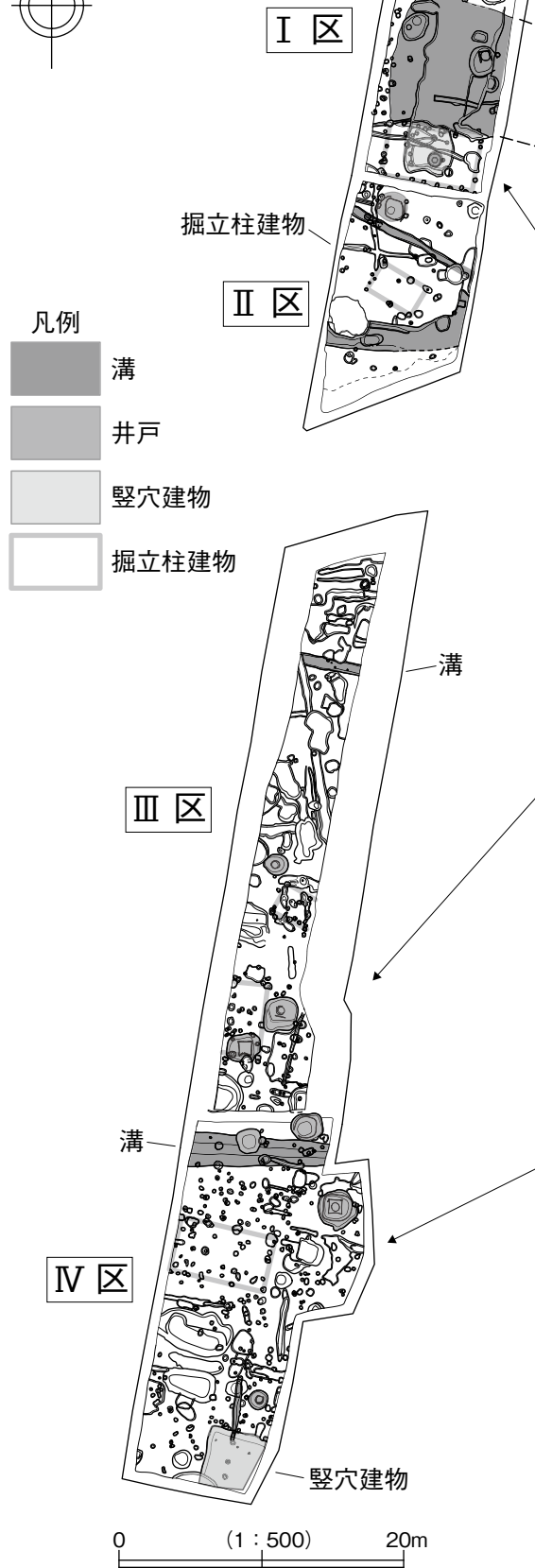
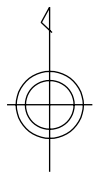


III 区 環濠 1 (北東から)



IV 区 方形周溝墓群と環濠 2 (上空、東から)

弥生時代遺構図 (縮尺: 1/500)



I 区 中世～近世の堀状の遺構 (西から)



I 区 掘立柱建物と竪穴建物 (東から)



III 区 掘立柱建物と井戸 (南から)



IV 区 掘立柱建物群 (西から)

中世遺構図 (縮尺 : 1/500)

よう か いち し かた 八 日 市 地 方 遺 跡

所在地 小松市土居原町、日の出町地内
調査面積 3,430㎡

調査期間 平成28年7月1日～平成29年6月30日
調査担当 中屋克彦、水田 勝、林 大智、川名 俊
矢部史朗、神谷英生、加藤江莉、土居佑治、中森茂明、中谷光里、西山美那

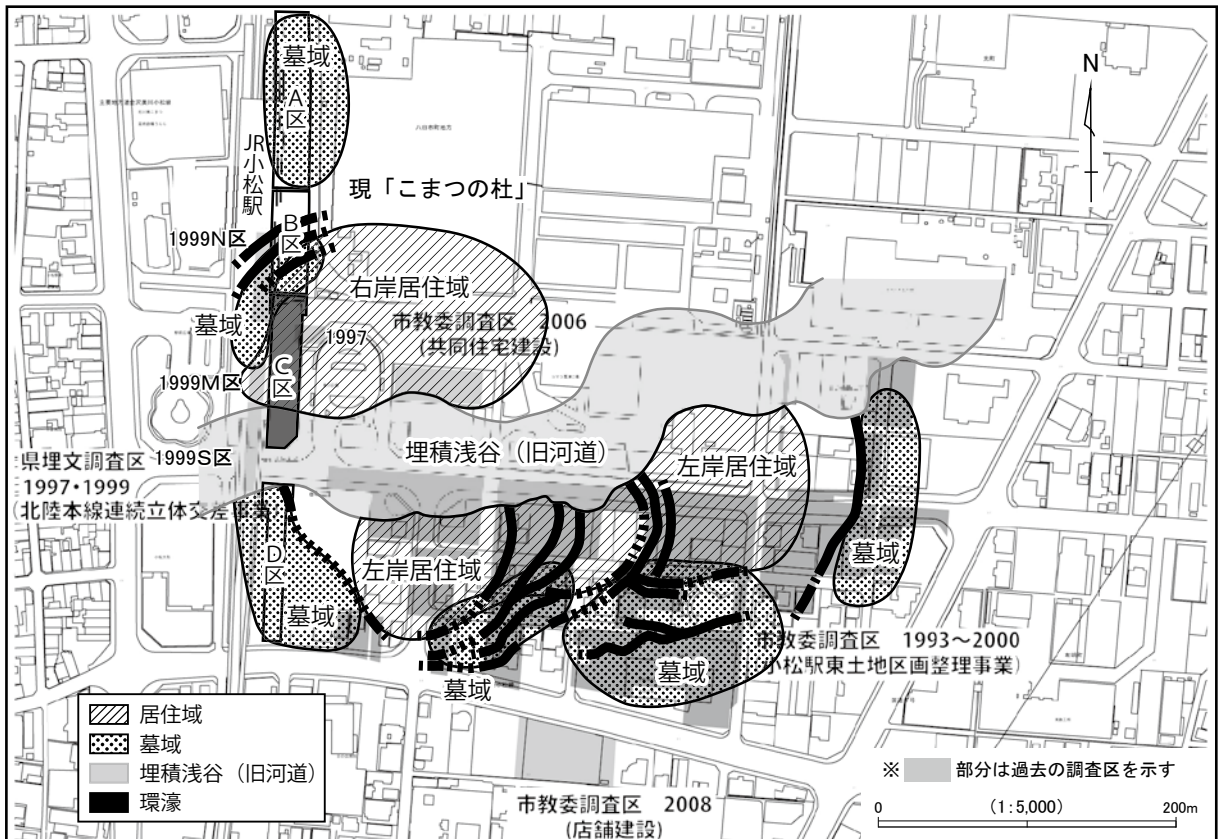


遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 周囲に平坦な沖積低地がひろがる水上交通の要衝に営まれた弥生時代中期の大規模集落。
- ・ 平成28～29年度に実施したC区の調査概要報告。
- ・ 遺構が複数切り合い、密集する居住域を確認した。
- ・ 調査区南端に川跡（埋積浅谷）を確認し、大量の木製品や土器のほか、玉作り関連遺物や獣骨・貝などが出土した。
- ・ 弥生時代の遺構面の下に、縄文時代後期の遺構を確認した。

八日市地方遺跡は、JR小松駅の東側一帯に広がる弥生時代中期の大規模環濠集落で、平坦な沖積低地に形成された標高1～2m程度の浜堤列上に立地している。遺跡周辺は、梯川とその支流の合流地点にあたり、干拓事業で消滅・縮小した潟湖が存在することから、水上交通の要衝に位置する遺跡として捉えられる。



調査区の位置と遺跡概要図 (縮尺：1/5,000)

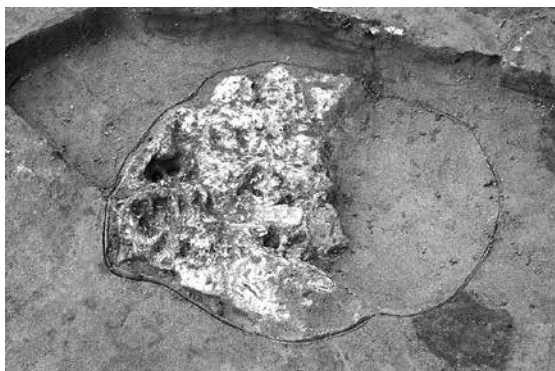
平成28(2016)年度の発掘調査は、A区、D区(前号で報告済み)とC区を対象として着手したが、C区で想定を上回る遺構・遺物が検出されたことと、縄文時代後期の下層面が新たに確認されたことから、調査は平成29(2017)年度にも引き続いて実施することとなった。したがって本稿では、28年度調査分も含め、C区全体の概要を報告する。

C区は、平成27(2015)年度の発掘調査で平地式建物や土坑などの遺構が濃密に検出された居住域と、その北辺を取り囲むように掘削された多重の環濠が確認されたB区と、28年度の発掘調査で川跡(埋積浅谷)の左岸が確認されたD区の間にあたり、北側のB区から続く遺構が密集する居住域と、川跡右岸の川岸区域に大別される。

居住域では、3つ4つの遺構が切り合い錯綜し、あるいは重なることも多く、まさに足の踏み場のないほどの遺構密度となった。主な遺構では、柱穴や溝などのほか、削り抜き材を利用した井戸、長さ7mにも及ぶ長大な土坑、土器づくり用と見られる粘土を貯蔵した小穴なども確認している。今後の検討により、掘立柱建物などの存在も浮かび上がるものと考えている。

これらの遺構からは、大量の弥生時代中期の土器や石器などが出土したほか、玉作り関連遺物も多く見られる。特に碧玉の管玉については、後述する川岸を含め、100点を超える完成品が出土しているが、原石・剥片から穿孔直前までの製作途中のものや、石鋸や砥石、石針などといった製作工具も多数出土している。また、新潟県糸魚川市などで産出するヒスイも多数出土しており、勾玉の完成品や分割する際の擦り切りの痕跡を残す石核も出土している。これらは製作工程を示す極めて良好な資料である。

遺跡中央を東西に貫流していた川跡(埋積浅谷)は、遺構検出面から川底まで約2mの深さで、川底は現在の海拔約-1mとなる。この川岸では、掘立柱建物や玉砂利が敷かれた石敷き遺構、削り抜き材や樹皮を利用した井戸もしくは貯蔵施設、製作途中の木製品を水漬けした貯木施設、トチ・クリ・



貯蔵された粘土の塊



碧玉の石核と剥片



碧玉の管玉と未成品

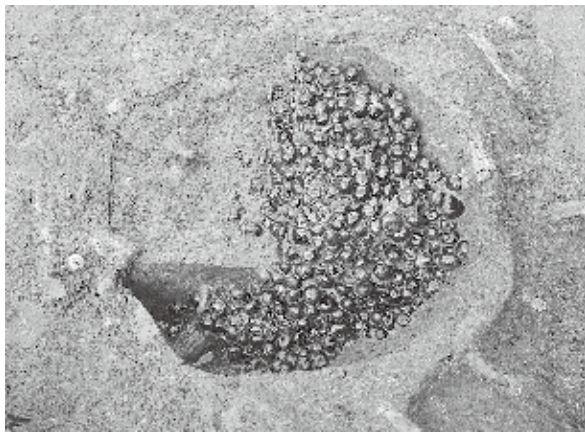


ヒスイの勾玉と製作関連遺物

ドングリの貯蔵穴やそれらの果皮を集積したトチ塚、シジミやカキを主体とした小規模な貝塚などを確認している。

川跡からは、膨大な量の土器や木製品を中心に、石器、玉作り関連遺物、シカの角などを利用した骨角器、動植物の遺存体などが出土している。出土した木製品には、鍬や鋤、泥除け、斧柄、横槌などの農工具、容器や匙などの食事具、鳥形や舟形などの祭祀具、カゴや箕などの編組製品などがあり、加工前のミカン割り材や枝材、木製品の結合や緊縛に利用される樹皮素材なども多く含まれている。また、これらの加工に使用されたと見られる「柄付き鉄製鉈」や青銅製品、小型の石器なども出土しており、この周辺で木製品の生産が盛んに行われていたことがうかがわれる。さらに、貝塚からは貝類のほか、イノシシ・ニホンジカ・イヌ・クジラなどの獣骨、コイ科やタイ科の魚骨や鱗なども出土しており、弥生人の豊かな食生活の解明につながる成果が期待される。

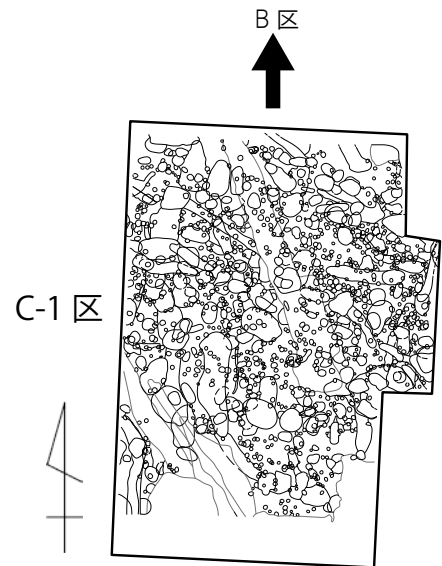
当初から今回の調査区では、直径2mmほどの管玉やそれに穴を開けるためのシャープペンの芯ほどの石針、魚の骨や植物の種など微細な遺物の出土が想定され、慎重な調査を心がけた。しかしながら時間的な制約もあり、これらが



トチの貯蔵穴



獣骨（犬の下顎骨）



柄付き鉄製鉈出土地点
石製装身具出土地点

0 10m

C区遺構概略図 (S=1/500)

比較的多く出土する範囲については、土ごと取り上げ洗い出す手法を採った。これにより、室内での整理作業でも多くの微細遺物の発見が相次いでいる。すべての土を洗うことができれば、どれだけの成果を上げられたことであろうか。

しかしながら、国内最古で初めて完全な形で発見された「柄付き鉄製鉈」、日本最多の出土数となった鑄造鉄斧の柄、ヒスイの玉と碧玉管玉を連ねた状態のまま出土した装身具、動物形土製品、土器づくりの台として使われたと見られるクジラの骨端板、朝鮮半島原産のコリヤナギを使った箕などなど物議を醸す稀少な出土品も少なくない。

今回の発掘調査で出土した遺物は、土器・土製品、木製品、石器・石製品を中心に、遺物収納コンテナ1,700箱以上にのぼり、その整理作業は始まったばかりである。出土品の科学分析や密集・錯綜した遺構の整理・検討と合わせ、やらなければならない作業も膨大である。今後、多くの方々のご指導・ご協力を仰ぎながら、持ち帰った資料からより多くの情報を引き出したいと考えている。(中屋克彦)



木製農具等の出土状況



空間を区画する板列



土器の出土状況



クリが入った編みかご



鉄斧の柄

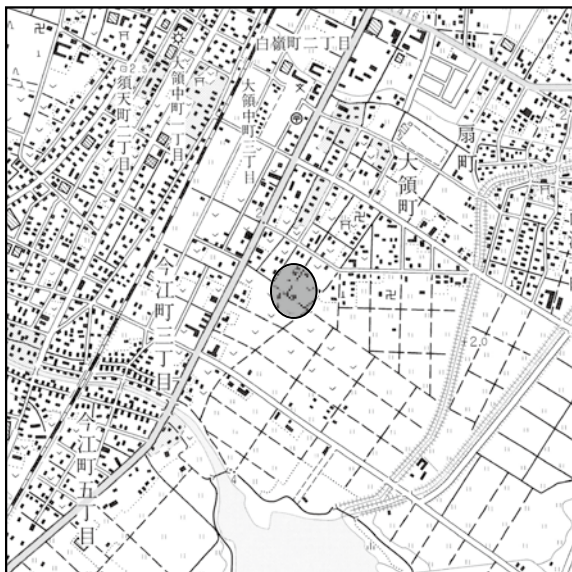


小型青銅器

大領遺跡

所在地 小松市大領町、今江町地内
調査面積 1,960㎡

調査期間 平成29年4月13日～平成29年8月25日
調査担当 安中哲徳、神谷英生



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・遺跡は木場潟の北側約500m、現在の海岸線から約5km内陸部の砂丘上に位置する。
- ・両側に側溝を持つ古代と中世の2つの道路遺構をそれぞれ延長約30m分確認した。
- ・中世の道路遺構は路面幅約7m、側溝上幅約40～80cm、深さ約25～40cmを測り、「浅井暁の戦い」との関連も想定される。
- ・古代の道路遺構は路面幅約8m、側溝上幅約1～1.5m、深さ約35～50cmを測る。道路の規模や木簡などから、これまで南加賀でみつかっていなかった、内陸部の経路を通る「古代北陸道」になる可能性が高い。

大領遺跡は、木場潟の北側約500mの小松市大領町と今江町の境に所在し、東側約200mには県指定史跡の浅井暁古戦場が存在する。古代（奈良・平安時代）の散布地の遺跡として知られていたが、北陸新幹線建設（金沢・敦賀間）に伴い、今回初めて発掘調査が実施された。

遺跡は、南西側の粟津駅方向から北側の小松駅方向にゆるやかに屈曲しながら伸びる砂丘上の東側縁辺部、現在の海岸線からは約5km内陸部の標高1～2m代に立地している。遺跡の西側には干拓事業により農地化した今江潟と前川、南側には木場潟、北側には一級河川の梯川が存在し、水上交通の要衝に位置する。また、現在も国道やJR北陸本線、建設中の北陸新幹線が通る陸上交通の要衝の地でもあり、南加賀地域における古代・中世の水上および陸上交通路の結節点付近に位置している。

調査の結果、古代と中世（鎌倉・室町時代）の2つの道路遺構を約30m離れた場所で確認した。道路の路面は後世の耕地整理により削平されていたが、古代の道路遺構は路面幅約8m、中世の道路遺構は路面幅約7mを測り、どちらも両側に側溝を持つ。出土遺物からは、古代の道路遺構は、9世紀初頭頃、中世の道路遺構は、16世紀後半頃には機能していたと考えられる。

他に、古代～中世の畝溝や水路状の溝、近世の水路状の溝などの遺構を検出した。また、遺構検出面である砂層の上面からは、縄文時代後期（約3,000～4,000年前）頃の土器や石器が出土した。



調査区の位置

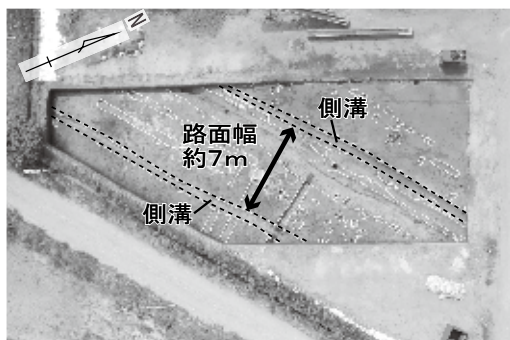


上空から見た調査区全景（北から）

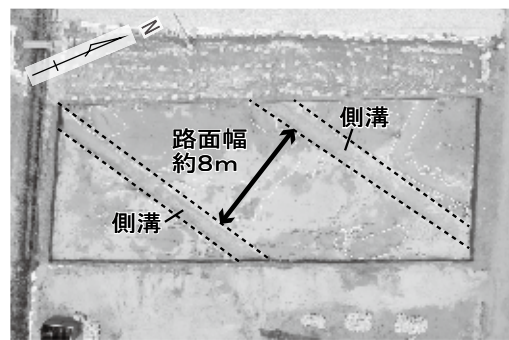
1区で検出した中世の道路遺構は、T字の水路状の溝が埋まった後につくられている。現況で上幅約40～80cm、深さ約25～40cm、断面U字形やV字形の側溝を両側に持つ。側溝の芯々（両側溝の中心での幅）幅で約7.5m、路面幅約7mを測り、延長約30m分を直線状に検出している。北から東へ約55度傾いた角度で延びており、北東方向へ延長させると、浅井畷古戦場の西側を通り、反対に南西方向に延長させると御幸塚城（今江城）跡の東側を通ることから、慶長五（1600）年に徳川方の前田利長と豊臣方の丹羽長重との間で起きた、「浅井畷の戦い」との関連も想定される。

3区で検出した古代の道路遺構は、現況で上幅約1～1.5m、深さ約35～50cm、断面逆台形やV字形の側溝を両側に持ち、土層の堆積から掘り直しの痕跡がみられる。側溝の芯々幅で約9.5m、路面幅約8mを測り、延長約30m分を直線状に検出している。道路遺構は北から東へ約60度の角度で延び、北東方向へ延長させると小松市古府町の加賀国府（823年立国）や国分寺推定地周辺へ向かう。反対に南西方向に延長させると今江瀧と木場瀧間の砂丘上を通り、柴山瀧の東側に通じている。

平安時代の法令集『延喜式』では、古代の官道（国家によって整備・管理・維持がなされた道路）の一つである、「古代北陸道」が設置され、石川県内には加賀7駅、能登2駅の駅家が置かれたとされている。これまで石川県内で確認された古代北陸道とみられる道路遺構は、奈良時代には路面幅7.5～8.5mであり、大領遺跡の道路遺構と同規模であることから、これまで南加賀でみつかっていなかった内陸部の経路を通る、「古代北陸道」であった可能性が考えられる。

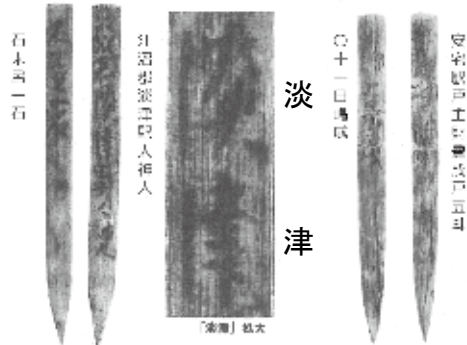


【1区】中世の道路遺構（上空・東から）

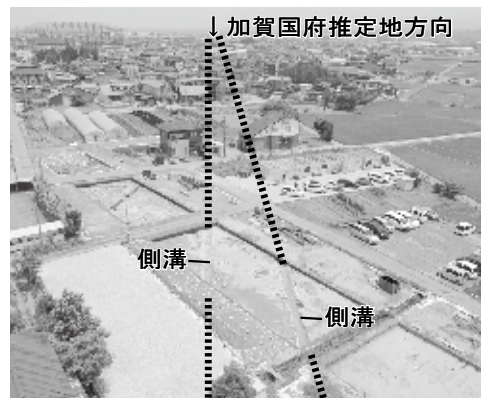


【3区】古代の道路遺構（上空・東から）

A 長屋王邸出土木簡「淡津駅」（710年）奈良文化財研究所提供
B 長岡京出土木簡「安宅駅」（789年）向日市教委提供



古代北陸道駅家関連木簡



上空から見た古代の道路遺構（南西から）

近年、平城京長屋王邸跡出土の「江沼郡淡津駅」と710年に書かれた木簡や長岡京跡出土の789年に「安宅駅」と書かれた木簡の存在などから、古代北陸道が8世紀の間に内陸部から海岸沿いの経路に変更になった可能性が指摘されている。今回大領遺跡でみつかった古代の道路遺構は、南に向かえば、粟津に向かうことから、内陸部を通る想定経路上に位置しており、古代北陸道になる可能性が高い。今後延長上での調査により、道路の続きや駅家、加賀国府・国衙・国分寺関連の遺構の発見が望まれる。

（安中哲徳）

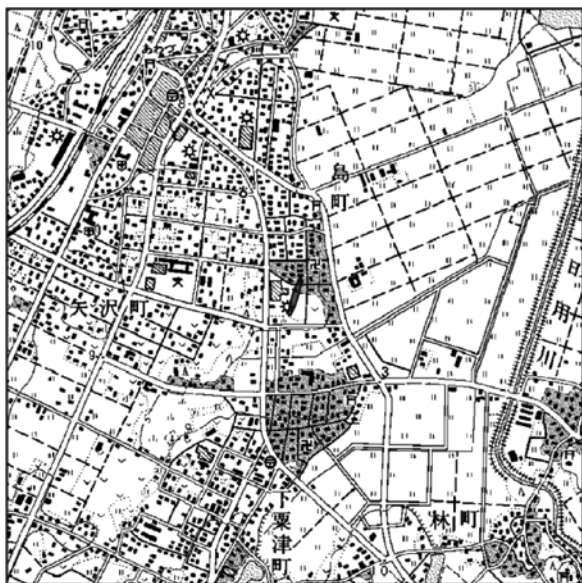
しま 島 遺 跡

所在地 小松市島町地内

調査面積 1,920㎡

調査期間 平成29年4月13日～同年7月31日

調査担当 熊谷葉月、島田亮仁、佐々木華子



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査地の遠景 (南西から)

調査成果の要点

- ・古墳時代終末期から中世に至る集落を確認した。掘立柱建物は古墳時代終末期で1棟、古代で2棟、中世で10棟を検出した。他に中世の井戸や土師器皿埋納小穴も確認した。
- ・遺物は古代の土師器、須恵器、瓦や、中世の土師器皿、加賀焼などが出土した。また、鉄滓などの鍛冶関連遺物も確認した。

島遺跡は JR 粟津駅から南東約1.0kmの月津台地の東縁に立地する。現況は畑地と宅地で標高約8.0～9.0mを測る。発掘調査は北陸新幹線建設に先立つもので、調査区を大きくⅠ～Ⅲ区に分けて実施した。その結果、古墳時代終末期から中世までの掘立柱建物13棟、柵列2条、井戸2基、溝、土坑、小穴などを確認した。

古墳時代終末期の建物としては、Ⅰ区の側柱建物の1棟がある。桁行8間×梁行5間、柱間の寸法は約1.1m、床面積は約48㎡の規模を有する。包含層から7世紀代の須恵器が散在的に出土していることから当該期の所産と考えられる。

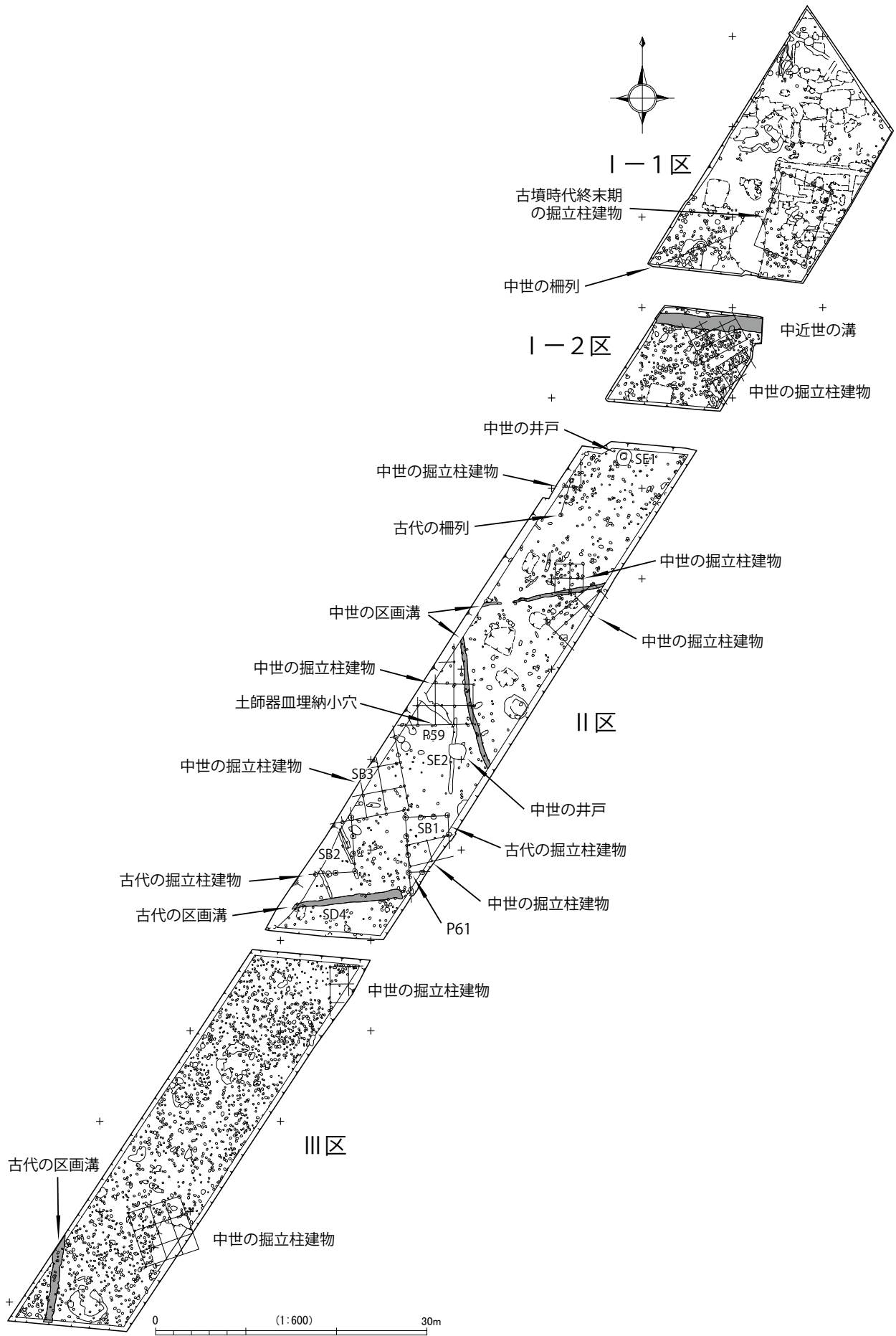
古代の掘立柱建物は、Ⅱ区の桁行4間以上×梁行3間の間仕切りを有する側柱建物（SB1）と2間×3間以上の側柱建物（SB2）の2棟があり、

どちらも調査区外に拡がる可能性が高い。柱穴には柱の当たり部分に白色粘土を突き固めた硬化部分があり、柱を安定させる根固めの役割が考えられる。このSB1・SB2と西側に延びる区画溝（SD4）は軸方向が一致し、整然と配置されていることから、計画的に建てられたことが想定される。また、SD4より南側は建物が確認されていないことから、北側の住居域を区画するために構築したと考えられる。

中世の掘立柱建物は総柱建物が主体であり、Ⅰ区で2棟、Ⅱ区で6棟、Ⅲ区で2棟の計10棟を確認した。井戸は2基を検出し、SE2で直径約1.8m、検出面からの深さ1.7mを測る。掘方が隅丸方形を呈することから、方形の木製井戸枠を伴っていたと推定される。また、油煙が付着した土師器皿に焼土塊を入れて埋納した小穴（P59）を確認し、地鎮などの祭祀を行っていたことが考えられる。

遺物は、古墳時代から近世・近代までの土器・陶磁器類が出土しているが、主体となるのは古代の土師器・須恵器である。また、平安時代の瓦や、中世の加賀焼などの他に、鉄滓なども出土している。

(島田亮仁)

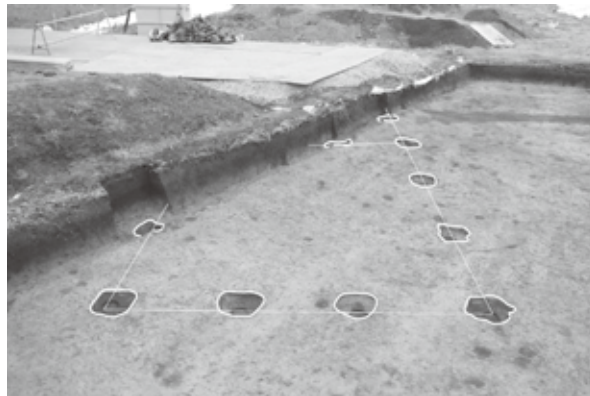




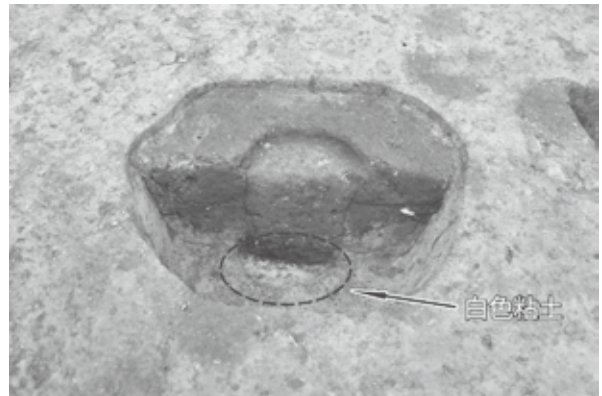
II区全景(上から)



古墳時代終末期の掘立柱建物(南から)



SB1(古代の掘立柱建物)段下げ状況(北から)



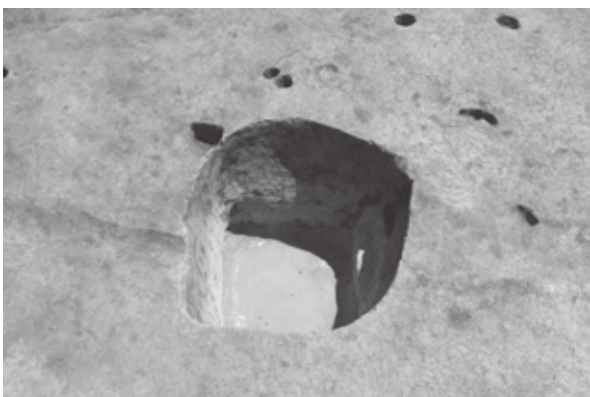
P61(SB1柱穴)白色粘土検出状況(西から)



SD4(古代の区画溝)完掘状況(東から)



SB3(中世の掘立柱建物)完掘状況(南から)



SE2(中世の井戸)完掘状況(西から)



P59(小穴)中世土師器皿出土状況(南から)

とのお 塔尾遺跡

所在地 加賀市塔尾町地内
調査面積 2,000㎡

調査期間 平成29年6月16日～同年10月5日
調査担当 澤辺利明、佐々木華子



遺跡位置図(S=25,000)



調査区位置図(S=1/5,000)



調査区遠景(南から)

遺跡は、加賀市東部を南北に流下する動橋川中流の河岸段丘上に立地し、周辺の標高は約43～45mを測る。

発掘調査は、市街と山中温泉を結ぶ県道39号山中伊切線道路改築にともなうもので、現道西側に接する水田、畑地が調査対象となった。

南北に細長い調査区はA～Fの6区に分割し調査を実施した。調査区北部のA・B区では、縄文時代の竪穴建物の可能性のあるもの3基や土坑、小穴を検出、中期中葉古府式期を主とする土器が出土した。また、A区南端～F区では、室町時代の掘立柱建物3棟以上や井戸4基、土坑、小穴などを検出、陶磁器や土師器が少量出土した。

調査地周辺では昭和47年の耕地整理の際に、A区北西方において縄文土器や石器多数の散布が確認され、A～C区西方では奈良・平安時代の須恵器や土師器、瓦が採集されている。今回の調査結果と合わせ、縄文時代の集落は現在の塔尾集落の北西側に、室町時代の集落は現在の集落に重なるように分布すること、さらに水田中には奈良・平安時代の遺跡も存在することが推定される。
(澤辺利明)



E区掘立柱建物(北から)

おおすがなみ
大菅波コショウズワリ遺跡

所在地 加賀市大菅波町地内

調査期間 平成29年4月14日～7月31日

調査面積 3,370㎡

調査担当 立原秀明、西田昌弘、横山純子、西村翼

調査成果の要点

- ・古墳時代から古代の竪穴建物、掘立柱建物群、井戸、道路状遺構(波板状凹凸)、土坑群、溝を検出し、河道の両岸に展開する集落を確認した。
- ・河道から縄文土器、石器、須恵器、土師器が出土し、うち3点は墨書土器であることを確認した。
- ・近世の土坑、井戸、小穴を確認し、陶磁器、ひしゃく、編物が出土した。



遺跡位置図 (S=1/25,000)

大菅波コショウズワリ遺跡は加賀市北部、江沼盆地の北東部に位置し、古墳時代後期から近世まで断続的に続く集落遺跡である。発掘調査は北陸新幹線建設工事に係り、平成28・29年度に実施した。

遺跡は北側の丘陵が南の八日市川流域に向けて傾斜する丘陵裾に立地する。

平成28年度の調査では古墳時代終末から中世の掘立柱建物や溝が確認され、その時期の集落遺跡であることが明らかとなった。西側には鞍部が広がっており、旧石器時代末の槍先形尖頭器や縄文時代の土器、石器などが出土した。

今年度(平成29年度)の調査では、調査区を北から南へ縦断する河道の両岸において古墳時代後期から近世にかけての遺構、遺物を確認した。古墳時代から平安時代の掘立柱建物群、井戸、土坑群、道路状遺構(波板状凹凸)を検出し、この時期に当遺跡は最盛期を迎えたと考えられる。掘立柱建物は河道の西側で5棟、東側に2棟みられた。西の5棟は2×2間、2×3間、2×4間の規模であり、2×2間の正方形に近い平面形の建物

と梁行きが長い長方形の建物が対をなしていると考えられる。

調査区中ほどでは竪穴建物1棟を検出した。耕地整理時の削平を受けているが、浅い周溝と4本の支柱穴を確認でき、周溝からは古墳時代後期の土師器椀が出土している。同じく古墳時代の遺構として調査区北端と調査区東寄りの2地点で5～6基の土坑が集中し、古墳時代の土師器が多数出土している。

また調査区中央部から河道に向けて約20mにわたり底面・平面形ともに不整形な小穴が連続する波板状凹凸を伴う道路状遺構を検出した。わずかながら土師器や須恵器の高杯・杯蓋が出土しており、時期は9世紀頃に比定される。

近世には、検出面の標高レベルが比較的高い北側に土坑や井戸などの遺構が集中してみられた。柱列は明らかにならなかったが礎石を持つ柱穴を検出し、掘立柱建物の存在が予想される。径1.5m、深さ35cmを測る土坑には底部にムシロ状の編物が2枚重ねて敷かれていた。土層断面の観察より径約80cm、底のないたらい状の枠の内部に編物を敷いていたものと予想される。

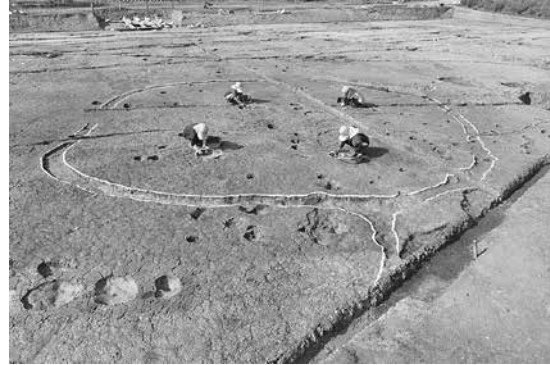
河道からは土師器や須恵器とともに、「#」と墨書された須恵器が見つかっており、祭祀関連遺物などが、河道に廃棄されたものと推測される。この他河道から縄文時代前期末から中期の土器、石器

など、今回遺構が確認されなかった時期の遺物が出土した。これらは河道の上流にあたる遺跡北側の丘陵部に当該期の集落が存在した可能性をうかがわせるものである。

今年度の調査では古墳時代から中世にかけて、遺跡の南にひろがる低地に近い場所に展開していた遺構群が、近世に入り丘陵末端の傾斜地へと移動していく様子が明らかとなり、現在の大菅波町の来歴を知ることができた。
 (横山純子)



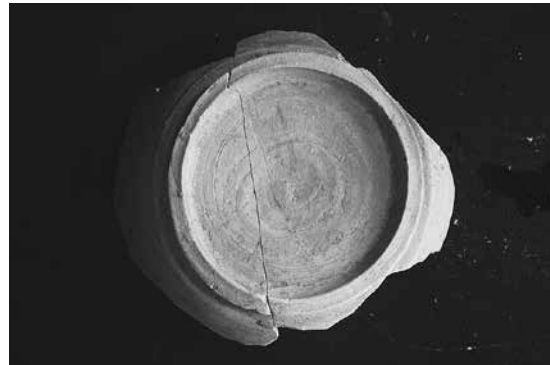
調査区遠景 (南西から)



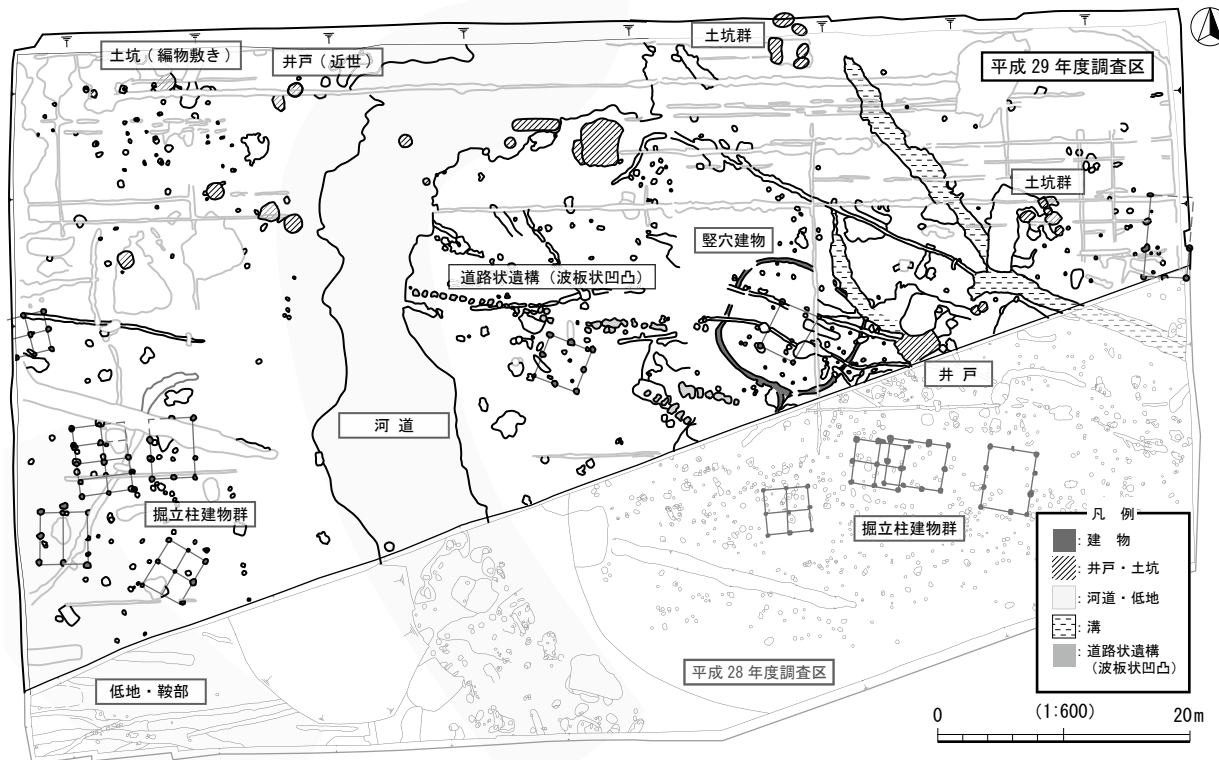
古墳時代の竪穴建物



河道と掘立柱建物群



河道出土の墨書土器「井」



大菅波コショウズワリ遺跡遺構配置図

平成29年度上半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

今年度上半期の整理は、西任田遺跡・中ノ庄遺跡、漆町遺跡の2遺跡である。

西任田遺跡・中ノ庄遺跡では記名・分類・接合、土器と木製品の一部の実測を行った。中ノ庄遺跡は古代末から中世初頭、西任田遺跡は弥生時代後期から終末期、古墳時代中期から後期、古代から中世前期の遺物が出土している。

漆町遺跡は弥生時代から江戸時代まで継続する遺跡で、今回は鑄造関連の整理となった。3区1面廃滓層Ⅱ層や4区の記名・分類・接合、溶解炉や炉壁、鍋の鑄型等の実測を行った。3区2面、4区では、弥生時代、古墳時代の遺構につく土器が少量みられたほか、室町時代の区画溝につく遺物が大半を占める。廃滓層の鑄造関連遺物の多くは割られており、あまり接合できなかったが、全形が分かるくらいには接合できたものもあった。接合してみると溶解炉は口径・器高共に70cm以上の物もあり、他に湯だめ栓、羽口栓、炉壁の結合部、鉄鍋と鍋の耳の鑄型等初めて目にする遺物が多く、その量からかなり盛んに鉄鍋などの鑄造生産が行われていたと窺える遺跡であった。 (横山 そのみ)



鑄造関連遺物の接合 (漆町遺跡)



溶解炉(中甑)の接合 (漆町遺跡)



溶解炉の実測 (漆町遺跡)



櫂の実測 (西任田遺跡、中ノ庄遺跡)

県関係調査グループ

上半期は、古府ヒノバンデニバン遺跡（七尾市 平成25年度調査）、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町 平成27年度調査）、末松信濃館跡（野々市市 平成27年度調査）、中ノ江遺跡（能美市・小松市 平成28年度調査）の出土品整理作業を行った。

古府ヒノバンデニバン遺跡は、平成27年度上半期に続く実測で、須恵器の坏や蓋が多数だった。

北吉田ノシロタ遺跡は、前年度に引き続き、木器の実測、土器の接合を行った。

木器は、腐食が著しい個体が多く、本来の外形をとどめているのかの見極めが難しく、破線出しに迷う事が多かった。土器は、前年度に続く所で、実測終了したものに接合したりで、前年度分も全部見返したりした。また、縄文のほぼ完形品もあったが、上下の接点が甘く、ほぼ径から積み上げていくような接合になった。

末松信濃館跡は、土器の実測3点、遺構図1枚で、早く終わった。

中ノ江遺跡は、小さい須恵器が混じり、須恵器だけを集めて接合をした。（村上泰子）



土器の実測（古府ヒノバンデニバン遺跡）



土器の接合（北吉田ノシロタ遺跡）



土器の実測（末松信濃館跡）



土器の接合（中ノ江遺跡）

特定事業調査グループ

上半期は、弓波遺跡（加賀市 平成28年度調査）、八日市地方遺跡（小松市 平成28・29年度調査）、金沢城跡（金沢市 平成28年度調査）の整理作業を行った。

弓波遺跡では、はじめに国関係調査グループ・県関係調査グループと共に土器の洗浄をした。この遺跡の土は粘土質のせいか汚れが非常に落ちにくく、調整を消さずに土を落とすため丁寧に洗う必要があり思うように作業が進まなかった。洗浄終了後は、特定事業調査グループが引き続いて記名・分類・接合を行った。H区からは埴輪の破片がいくつか出土していたが、どれも大きく成長することなく残念であった。また、D区では組み立てると完形にちかい土器が数多く出てきた。それらを一人4・5個体程度受け持って接合していたが、あまりにも数が多すぎて作業時間が足りなくなってしまった。

八日市地方遺跡では、木器の分類を行った。木器の分類のみをするのは初めてのことで全てが手探り状態で、まず道具の準備や作業手順を考えることから始まった。手順も決まり、いざ作業に取り掛かろうと思っても、資料を見ながら器種や木取り、樹種を分類し、必要事項の記入、メモ用の写真撮影、データ入力等の一連の作業に、はじめのうちは手間取られてしまった。しかし、慣れてからは流れるように動くことができた。また、作業中は貴重な木製品をたくさん見ることができ勉強になった。

金沢城跡では、昨年に引き続いて記名・分類・接合、記名・分類を行った。記名・分類・接合と記名・分類では、主に陶磁器と瓦を中心に整理し、陶磁器は昨年と接合するものがいくつかあった。瓦については、やはり腰瓦と平瓦の仕分けに苦労させられた。
(澤山 彬)



瓦の分類（金沢城跡）



木器の分類（八日市地方遺跡）



土器の接合（弓波遺跡）

平成29年度 環日本海文化交流史調査研究集会の記録

はじめに

センター所長 藤田邦雄

環日本海文化交流史調査研究集会は、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが平成12年度から、日本海沿岸域に共通するテーマを選んで各地域と調査・研究を行い、交流を図ってきたもので、平成29年度で第18回目の開催となりました。

なお、当研究集会におきましては、本年度より調査研究の深化・充実を目的に、1年目を「基礎研究」、2年目をその成果を踏まえた「研究集会」とし、1年目の今年度は、近年北陸の近世城郭の調査で広く出土が知られるようになった近世成立期のカワラケ(土師器皿)に着目し、先行する戦国時代の資料からの系譜をたどりつつ、編年案を主眼とした基礎研究に充てております。

- 1 主催 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 2 会場 石川県埋蔵文化財センター研修室
- 3 参加者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等90名
- 4 内容及び日程

テーマ 「近世成立期の土器・陶磁器様相 —カワラケを中心に—」

日時 平成30年2月23日(金) 午前10時～午後4時20分

・報告

- 福井県(1) 阿部 来 (勝山市教育委員会)
福井県(2) 中原義史 (福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)
石川県(加賀) 立原秀明 (公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)
石川県(金沢城) 滝川重徳 (石川県金沢城調査研究所)
石川県(能登) 岩瀬由美 (公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)
富山県 堀内大介 (富山市埋蔵文化財センター)

・資料検討会 (出土資料の比較検討)

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容 (調査研究集会テーマ)	記録の掲載 (石川県埋蔵文化財情報)
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落—生業の視点で考える	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 —甕・壺・播鉢を中心に—	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具—漆製品・石製品を中心に—	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩—その系譜と伝播を探る—	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通—肥前陶磁から探る—	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標—その出現と展開—	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相—カワラケを中心に—	本号 (第39号)

越前における15～16世紀中葉の土器皿

阿部 来 (勝山市教育委員会)

はじめに

越前における15～16世紀中葉の土器・陶磁器は、一乗谷朝倉館の調査を皮切りに諏訪間興行寺遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡、福井城跡などの資料をもとに変遷が示されてきた(小野1979、南1992・1999・2003、富山1997)。また、北陸中世考古学研究会での検討(岩田・河村2006)や法土寺遺跡(南2003)、藤巻館跡、白山平泉寺旧境内などの資料から、16世紀の様相がより詳細に判明しつつある(阿部2009)。

その後も、中角遺跡(富山2010)、石盛遺跡(清水2013)一乗谷西山光照寺(櫛部2015)などで土器皿が詳細に分類され、良好な資料が充実してきた。今回は、土器皿の系譜の検討から様相を整理したい。

1 分類

器形の系譜を念頭に15世紀以降の京都産土器皿の影響が強いA類、B類と前時代からの系譜や在地化の著しいC～F類に分類する。

A類は、深手で丸みを帯びた底部から開き気味に緩やかに立ち上がり、口縁部が外反するものである。大型品は、口縁部の横ナデを2回以上施す事例が多い。小型品は、口縁部が強く屈曲するものもみられる。主に京都産土器皿の伊野Gタイプ(伊野1997)、中井皿H(中井2011)を模倣したと考える。

B類は、平底から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部が外反するものである。口縁端部をつまみ上げる所作を行う。主に伊野Iタイプ、中井皿Kを模倣したと考える。

C類は、立ち上がり部分から強く外反するものである。14世紀以前の京都産土器皿、主に伊野Jタイプの影響を起点に変化したとみられる。

D類は、丸底から緩やかに内湾気味に立ち上がる器形である。口縁部の横ナデが不明瞭で、所作を伴わないものも含む。

E類は、平底から緩やかに立ち上がるものである。

F類は、底部から上方へ強く屈曲し、直立気味となるものである。

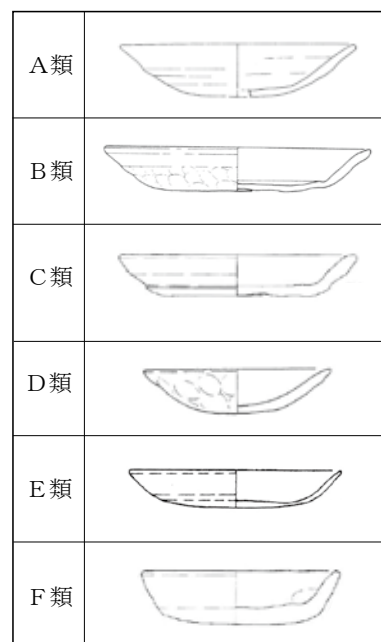


図1 分類概念図

縮尺不同

2 資料と変遷

越前焼など共伴する陶磁器の年代も勘案しつつ、基準となる資料について変遷を述べたい。

14世紀末から15世紀初め頃に位置づけられる資料としては、伝安楽寺遺跡、柚山城伝飽和宮跡がある。伝安楽寺遺跡は、包含層資料であるが、土器皿は11～12cm、7～8cmの大小2法量で構成され、大皿は底部際で強く屈曲し口縁部1段ナデによって強く外反するA類である。小皿は緩やかに立ち上がり、口縁端部は丸くおさめるE類である。柚山城跡伝飽和宮跡は、A類とD類がみられる。

15世紀初めから中頃にかけては、石盛遺跡かわらけ土坑、堤遺跡SX01、中角遺跡堀4下層、中角

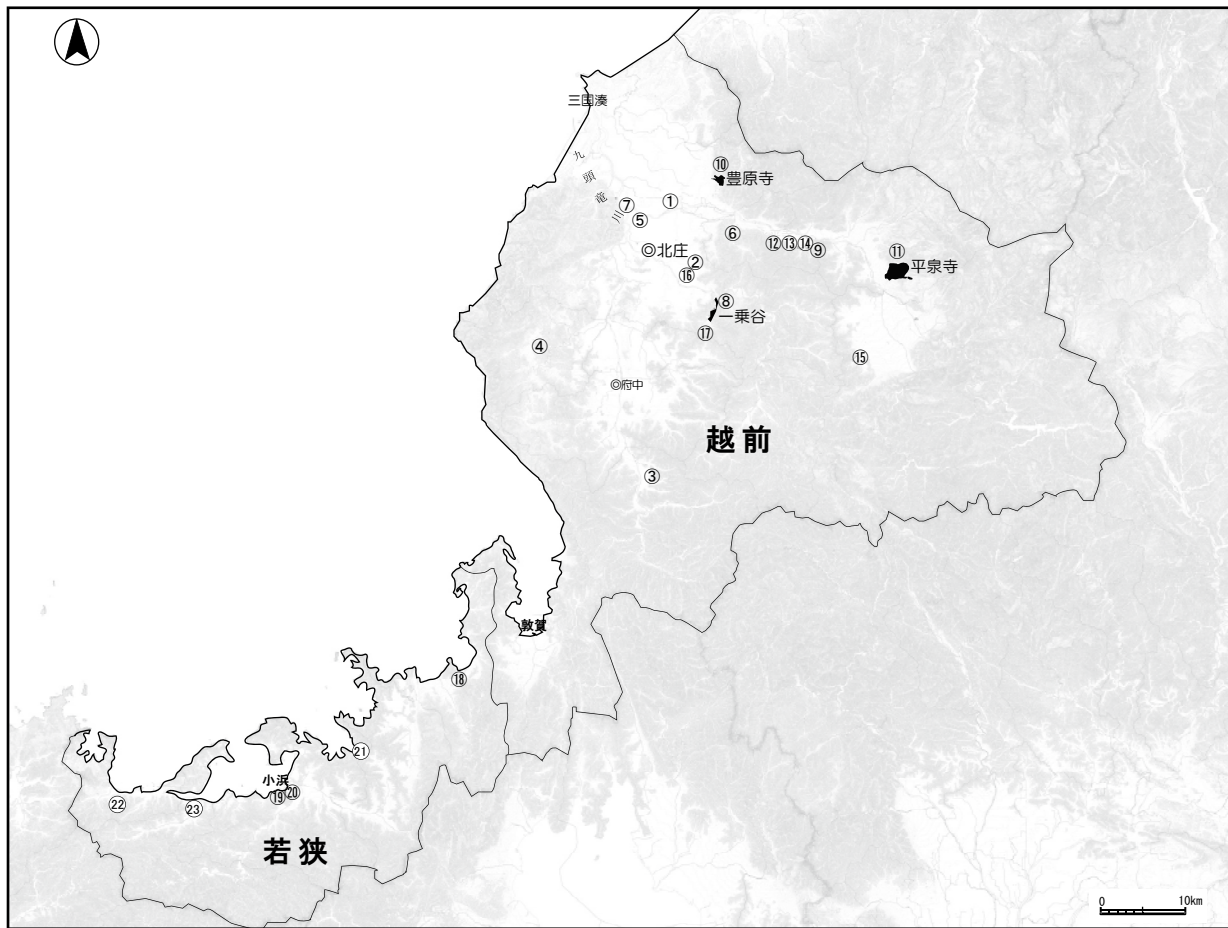


図2 遺跡位置図

【遺跡名・引用文献】

- | | |
|-------------|---|
| 1 石盛遺跡 | 福井市教育委員会 2015 『石盛遺跡』Ⅱ |
| 2 伝安楽寺遺跡 | 福井県教育委員会 1974 『北陸自動車道関係遺跡調査報告書第6集』 |
| 3 杣山城伝飽和宮跡 | 南条町教育委員会 1978 『史跡杣山城跡Ⅱ 伝飽和宮跡・外濠確認発掘調査報告』 |
| 4 堤遺跡 | 織田町教育委員会 2001 『堤遺跡』 |
| 5 中角遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『中角遺跡3』 -Ⅱ・Ⅲ区上層編-』 |
| 6 諏訪間興行寺遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008・2010 『諏訪間興行寺遺跡』Ⅰ・Ⅱ |
| 7 法土寺遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『法土寺遺跡』Ⅱ |
| 8 一乗谷朝倉氏遺跡 | 福井県教育委員会 1986 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』1～15ほか |
| 9 藤巻館遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『藤巻館遺跡』 |
| 10 豊原寺跡 | 丸岡町教育委員会 1982 『豊原寺跡3』ほか |
| 11 白山平泉寺旧境内 | 勝山市教育委員会 1992 『白山平泉寺-南谷坊院跡発掘調査概報Ⅱ-』ほか |
| 12 大月前山遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2011 『大月前山遺跡』 |
| 13 竹原弁財天遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『竹原弁財天遺跡』 |
| 14 藤巻多珍坊遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008b 『藤巻多珍坊遺跡』 |
| 15 下黒谷遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998 『下黒谷遺跡』 |
| 16 曾万布遺跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008c 『曾万布遺跡』 |
| 17 三峰村寺跡 | 鯖江市教育委員会 2000 『三峰村墓地跡』 |
| 18 国吉城跡 | 美浜町教育委員会 2011 『国吉城址史跡調査報告書』1 |
| 19 後瀬山城跡 | 小浜市教育委員会 1989 『後瀬山城』 |
| 20 若狭武田氏館跡 | 小浜市教育委員会 2014 『若狭武田氏館跡関連遺跡発掘調査報告書』 |
| 21 館藪遺跡 | 三方町教育委員会 1994 『館藪遺跡』 |
| 22 石山城跡 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『石山城跡』 |
| 23 山田中世墓 | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2004 『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群』 |

遺跡堀4中・上層、中角遺跡井戸16などが比較的良好な事例といえよう。

堤遺跡SX01はA類とF類、中角遺跡ではA、C、D、E、F類、石盛遺跡かわらけ土坑ではD、F類が確認できる。この段階では、7～8cm、9～10cm程度の中小型品に加えて、13～15cm程度的大型品が加わり、新たな使用方法の定着を読み取ることができよう。法量と器形の関係は必ずしも一対ではなく、堤遺跡SX01はすべての器形で大中小を構成するが、石盛遺跡かわらけ土坑では大型品はD類、中小型品はF類となっている。

15世紀中ごろの基準資料としては、諏訪問興行寺遺跡Ⅲ期炭化物層がある。土器皿はB、D、E類が確認できる。後続する時期が主体となる、諏訪問興行寺遺跡Ⅳ期、法土寺遺跡、一乗谷朝倉氏遺跡24次Ⅰ期遺構面ではA、B、D、E類で構成される。

豊富な資料の存在する一乗谷朝倉氏遺跡では、50次SS2001に注目したい。50次SS2001は、複数回に及び道路面がかさ上げされており、ある程度の層位学的な裏付けを持つ資料である。

最下層では、B類の大皿は薄手の丁寧なつくりで、平底から直線的に立ち上がり、口縁部は外反気味で、口縁端部は細く尖り気味となるものが多い。また、大型品には、内定面際に凸状の圏線がみられるものが多く、ごく浅い凹状圏線の内側が若干肥厚し凸状を呈するものは少数である。16世紀前葉でも第1四半期の京都産土器皿に近いと考える。小型品にはB、D類がみられる。

最上層である1～2面のB類は、やや厚手で平底から直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚し外反気味で、口縁端部は丸くおさめるものと摘み上げるものがみられる。内底面際には鋭く凹む圏線が巡っており、京都産土器皿の16世紀第3四半期の特徴を示す。

また、16世紀第3四半期の基準資料となっている朝倉館の土器皿は、平底から直線的に立ち、口縁部を弱く外反させ、口縁端部を摘み上げるB類が主体である。中大型品は内底面際に鋭い凹状圏線がめぐる。この時期の器形と法量の関係は、多法量に展開するB類、小型品のみのD類というすみわけが明確になる。

16世紀第4四半期まで継続する、藤巻館跡遺跡でもB、D類が確認できる。B類は、平底から直線的に立ち上がる器形を基本とし、口縁端部は摘み上げるもののほか、側面から強くナデ、断面形は方頭状を呈するものがみられる。

このように16世紀代のB類は、凹圏線の明確化や器壁の厚手化のほか、口縁端部の鋭い摘み上げが徐々に鈍化し、方頭状になるといった型式変化をたどる。

おわりに

以上、越前のなかでも一乗谷に近い福井平野の資料を中心として変遷を整理した。この地域では、15世紀代に在地で展開する複数の系譜と京都の影響が顕著なものが法量を共有しながら併存し、16世紀になると大型品は同時期の京都に近い系譜にほぼ集約される。一乗谷朝倉氏遺跡では、とくに京都に非常に近い土器皿が生産されており、より直接的な交流の要であったと考えられよう。

複数の系譜から京都の系譜に集約されていく背景を明らかにするためにも、ほぼ同様の変遷をたどる内陸部の白山平泉寺旧境内や若狭の資料についても、今後比較を行っていきたい。

ご芳名を逸する非礼をおそれ、逐一は記しませんが、多くの方々に資料調査などでご配慮をいただきました。末筆ながら深く感謝申し上げます。

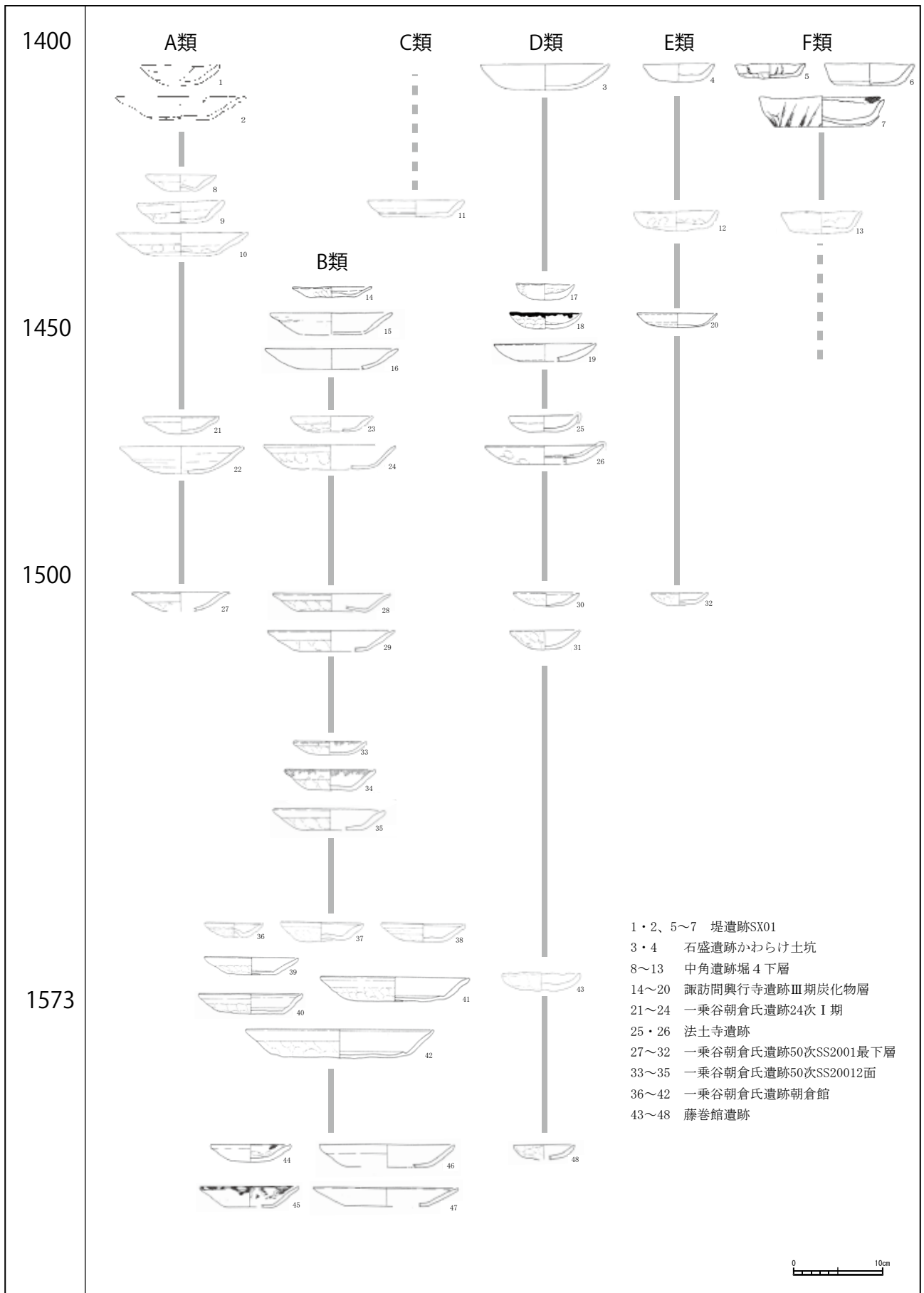


図3 土器皿の変遷(S=1/6)

【引用参考文献】

- 阿部来 2009 「土器皿からみた中世後期の越前」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要』2008 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 伊野近富 1997 「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社
- 岩田隆・河村健史 2006 「越前における様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 小野正敏 1979 「第5章遺物2陶磁器類 B. 土師質土器」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I 福井県教育委員会
- 櫛部正典 2015 「IV 遺物2土師質土器」『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』11 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
- 清水孝之 2013 「第3章遺構と遺物第3節遺物」『石盛遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明 1992 「諏訪問興行寺遺跡」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世考古学研究会
- 富山正明 1997 「越前国における13～16世紀の土師器編年」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 富山正明 2008 「第IV章遺物」『諏訪問興行寺遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明 2010 「第5章遺物第1節土器」『中角遺跡3- II・III区上層編-』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中井淳史 2011 『日本中世土師器の研究』中央公論美術出版
- 野澤雅人 2001 「第4章第1節遺物」『堤遺跡』織田町教育委員会
- 南洋一郎 1992 「越前・若狭における様相」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 南洋一郎 1999 「一乗谷出土カワラケ基本分類基準」『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』VII 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 南洋一郎 2003 「第3章中世第2節遺物1. 土師質土器」『法土寺遺跡』II 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

近世前半期越前のカワラケの諸様相—福井城跡出土資料から—

中原 義史（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

はじめに

ここでは、越前における16世紀末から17世紀にかけてのカワラケの基礎研究として、器形分類と編年案の提示を行う。本来なら、越前各地の城下町や集落遺跡の出土資料の検討を行うべきであるが、年代を絞り込める遺構出土資料の少なさから、今回は福井城跡出土資料のみを基に作業を行った。

1. 研究史

近世福井城跡のカワラケの年代観を最初に提示したのは河村健二氏で、『福井城跡』（2001）においてであった。その後、『福井城跡Ⅳ』（2004）で青木元邦氏により編年案が示された。さらに、『福井城跡』（2015）において、河村氏の器形分類を整理・補足する形で、岩田隆氏により新たな分類がなされ、編年の見通しが示された。現在のところ、この岩田編年を大きく変更する必要性はなく、以下では岩田氏の成果に若干の修正を加えてながら稿を進めてゆく。

2. 器形分類

『福井城跡』（2015）では、16世紀末から19世紀にかけてのカワラケを、B・C・D・G・H・K・R系の7つに分類した。この内、B・C・D系は一乗谷朝倉氏遺跡で出土するカワラケB・C・D類の形態や製作技法を受け継ぐものであるが、細かい点で両者に差異があるため、ここでは類と系として呼び分けている。

B系：手づくねで皿状に成形したもので、基本的にナデ調整は行わない。そのため、指押さえ痕がそのまま残り、全体に不整形で口縁は波打つ。法量は直径8.0cm以下のものがほとんどである。

C系：手づくねで皿状に成形したもので、内面を親指、口縁部外側を曲げた人差し指で挟むようにして回しナデを行い、一周した所でナデを外方に抜いて形を整える。底部がやや丸く、見込と立ち上がりの境界があまり明確ではない。口縁端部には、段を作り上につまみあげたような形態のものと、段を持たず上方にとがり気味に納めるものがある。内面の回しナデの範囲にも差異があり、見込中心付近からほぼ全面にナデがあるものをC系1、見込の途中からしかナデを行わないC系2、立ち上がり部分にしかナデを行わないC系3に細分することが可能である。C系2・3には見込に横ナデを行うものもある。

D系：手づくねで皿状に成形したもので、立ち上がり部内面を親指、外面を曲げた人差し指で挟んでナデを行い、一周した所でナデを外方に抜いて形を整える。一乗谷朝倉氏遺跡のD類では、ナデを抜く時にそれまでのナデ方向と反対方向に抜いており、この点が福井城跡D系と異なる。見込には横ナデを行い、底面はC系に比べて平らである。口縁端部には、段を作り上につまみあげたような形態のものと、段を持たず上方にとがり気味に納めるものがある。見込と立ち上がり部との境界がC系に比べて明瞭で、圏線状になるものが多い。この部分の形態の違いからD系を1～3に細分している。D系1は圏線状の部分が明瞭なもので、D系2には圏線状の部分が弱いものと、立ち上がりが大きく外反し器高が低いものをまとめている。D系3は圏線状の表現がわずかに残る程度である。D系1の内面には、ナデ調整の下に布目を残すものが比較的目につく。製作時の痕跡であるが、どのような作業に伴い付いたものかは不明である。

G系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、内型に粘土を押し付けて成形し、口縁部に挟みナ

デ、見込に横ナデを施す。底部には板目圧痕を持つものが見られる。

H系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、形態はG系に似ているが手づくねで製作されたものである。G系に比べ、形がゆがんでいたり、内面に凹凸が見られたりする。

K系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、立ち上がりに内側に折り曲げるように強く挟みナデを行う。立ち上がり内外のナデの深さが同じで、見込には横ナデを施す。

R系：一乗谷朝倉氏遺跡では出土しないもので、ロクロ成形で製作したものである。内面には回転ナデ、底部には回転糸切り痕が残る。

福井城跡出土のカワラケには、突起を付けて灯明皿の受皿としたと考えられる製品があり、これも今回の検討対象に含めた。その場合、カワラケ部分の器形や調整によって分類を行っている。また、福井城跡では上記の分類に入らないものも他に少数ながら存在している。

3. 基準資料

編年の基礎となる基準資料は、平成12～14年にかけて福井駅付近連続立体交差事業に伴い実施された福井城跡発掘調査（『福井城跡』2015）で出土したものから、遺構の性格や共伴遺物により廃棄時期が絞り込めるものを選んだ。紙数に限りがあるため、詳しくは原報告書を参照してもらいたい。なお、編年表中の遺物実測図の番号は報告書掲載の番号と同じである。

（1）天正3年（1675）前後を下限とする資料 溝32179出土の資料で、共伴遺物から天正3年（1675）の柴田勝家による北庄城築城以前のものと考えている。北庄城築城以前に、この付近に「北庄」の町や朝倉一族の居館があったとされるが、明らかにそれに伴う遺構は確認されていない。本調査区でも、この時期の遺構は少なく、分布も散漫で遺構の性格は不明であった。資料は一乗谷朝倉氏遺跡のD類に分類できる。

（2）慶長6年（1601）前後を下限とする資料 溝31126・32167・32187出土の資料である。慶長6～11年（1601～1606）にかけての結城秀康による福井城築城までに埋められており、それ以前の北庄城の屋敷地に伴う溝と考えている。資料は、B系、C系1・2、D系1に分類できる。

（3）17世紀前葉に納まる資料 土坑34197・54109出土の資料である。福井城の武家屋敷地の土坑で、17世紀前葉の遺物がまとまって出土した。資料は、C系1・2、D系1・2に分類できる。

（4）寛文9年（1669）前後を下限とする資料 旧河川42133・石組溝4220下層・池32127出土の資料である。旧河川42133・石組溝4220下層は寛文9年の大火後に、焼土を含む土砂で埋められており、この時期を下限とする資料群である。池32127は17世紀後葉までには改修に伴って埋められており、共伴する陶磁器は17世紀中葉のものが中心である。資料は、B系、C系1・2・3、D系1・2・3、R系に分類できる。C系2のカワラケには、粘土で把手を付けたものがあり、18世紀にかけての形態変化から、灯明皿の受皿として製作したものと考えている。

（5）17世紀後葉から18世紀前葉にかけての資料 土坑3134上層・溝3205・土坑36026・36076・36141出土の資料である。いずれも武家屋敷地の境界溝や廃棄土坑で17世紀後葉から18世紀前葉の陶磁器と共伴している。遺物は、B系、C系1・2・3、D系2・3、G系、H系、K系、R系に分類できる。H系のものには把手が付いたものがある。

4. 編年案

以上の資料を基にして、福井城跡の16世紀末から18世紀前葉のカワラケ編年案を示す。大きくはⅠ～Ⅲの3期に分けられ、Ⅰ期は16世紀末から17世紀前葉、Ⅱ期は17世紀中葉、Ⅲ期は17世紀後葉

から18世紀前葉に相当する。

I期にはB・C・D系という一乗谷朝倉氏遺跡からの系譜を引くカワラケがそろっている。ただし、D類のナデの抜き方等には、一乗谷にはない新しい要素も見られる。I期については、16世紀末から17世紀初頭にかけてと、17世紀前葉の2時期に細分できるのではとも考えたが、画期を設ける明確な根拠が見いだせなかったため、ここでは同一時期にまとめておく。

II期にはB・C・D系以外にR系が加わる。B系は、この時期の基準資料には含まれていないが、前後の時期に認められることから、この時期にもあったと考えている。また、K系も基準資料には含まれていないが、他の遺構での出土状況から、この時期に現れた可能性がある。さらに、この時期にはカワラケに把手を付けた、灯明皿の受皿が作られるようになる。
















III期にはII期のものに加えて、新たにG・H系が加わる。把手付のものは、C系以外にG・H系のカワラケにも見られる。

出土量を見ると、C・D系が多数を占め、B系がそれに続き、他のものはごく少数である。なお、18世紀後半以降については、G系が主体を占めるようになり、C・D系は数を減らしていき、B系は見られなくなる。C・D系では、口縁端部の摘み上げ状の調整によって段を持つものは、新しくなるに従い少なくなっていく傾向がある。また、I期ではC系1・D系1系が多くを占めるが、II期以降は少なくなっていく、III期にはC系2・3やD系2・3が中心となっている。

5. まとめ

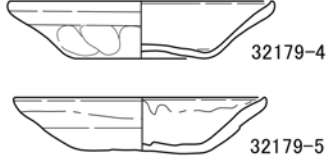
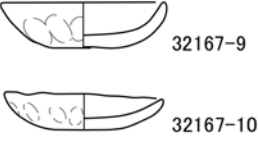
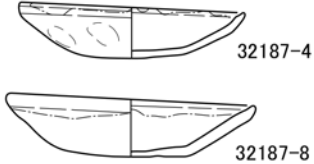
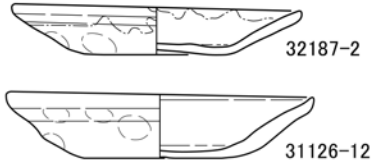
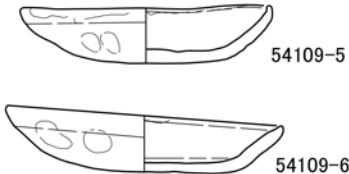
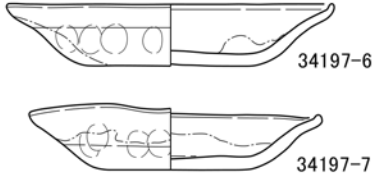
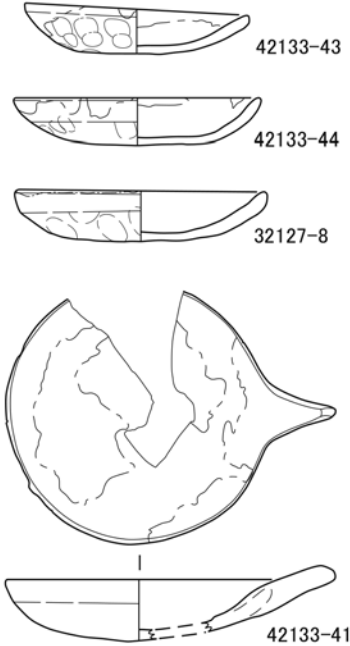

以上、岩田氏の研究成果を基に、福井城跡出土のカワラケの編年案を提示した。今回は時間の都合もあり、岩田氏と私が整理作業に携わった調査地点のカワラケのみを対象としたが、今後は他の地点出土資料の比較検討も必要と思う。また、阿部来氏が担当した越前中世後期のカワラケ編年との関係についても、これから整理する必要がある。さらに、カワラケに関する他の検討課題として、法量の分布や油煙痕跡の有無などが考えられるが、今回は手を付けることができなかった。

福井城跡出土カワラケの器形分類


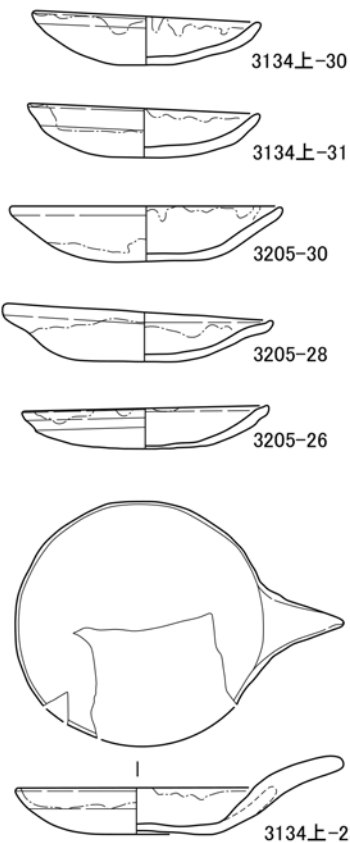
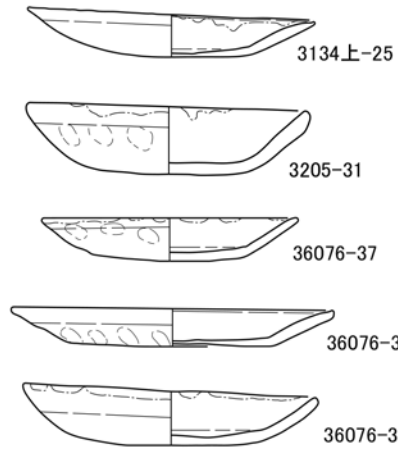
B系	手づくねでナデ調整無し。小型品のみで、不整形のことが多い。	 32187-10	16世紀末～
C系	見込みと立ち上がりの境がD系に比べて不明瞭。内面に回しナデを行う。		16世紀末～
	1 見込み中心付近から回しナデを行う。	 32187-4  32187-8	
	2 見込みの途中から回しナデを行う。	 42133-41	
	3 立ち上がりのみに回しナデを行う。	 32127-6	
D系	見込みと立ち上がりの境がC系に比べて明瞭。見込み端から回しナデを行う。		16世紀末～
	1 境が明瞭で、圏線状になる。	 32187-2	
	2 境がやや弱くなったものと、立ち上がりが大きく外反し器高が低いもの。	 54109-6  36079-38	
	3 境が弱く、圏線状の表現がわずかに残る。	 36079-39	
G系	型成形	 3134上1-26	17世紀後葉～
H系	G系に形が似る手づくね	 36141-6	17世紀後葉～
K系	立ち上がりを指で挟んで、同じ深さまで抜きナデを行う。	 3134上-32	17世紀中葉～
R系	ロクロ成形	 32127-12	17世紀中葉～

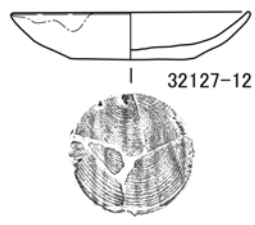
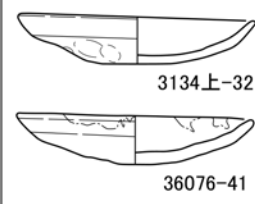
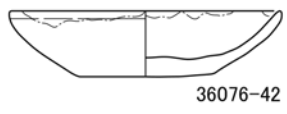
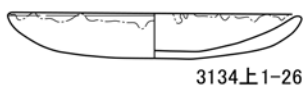
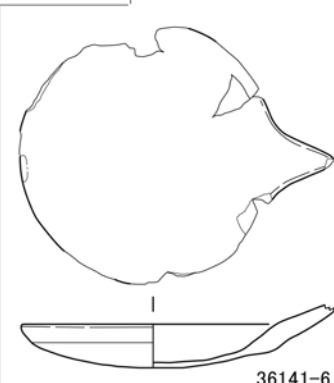
参考文献

- 福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001 『福井城跡』水環境整備事業（光明寺用水地区）に伴う調査
 福井市文化財保護センター 2004 『福井城跡Ⅳ』福井駅付近連続立体交差事業および市道宝永清川線改善事業に伴う発掘調査
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015 『福井城跡』J R北陸線外2線連続立体交差事業に伴う調査

推定年代	B系	C系	D系
朝倉期 16世紀 中後葉			
I期 16世紀末 ~ 17世紀初			
II期 17世紀 前葉			
II期 17世紀 中葉			

第1表① 福井城跡出土カワラケ編年（縮尺1/3）

推定年代	B系	C系	D系
III期 17世紀 後葉～ 18世紀 前葉	 <p>3134上-28</p>	 <p>3134上-30 3134上-31 3205-30 3205-28 3205-26 3134上-23</p>	 <p>3134上-25 3205-31 36076-37 36076-38 36076-39</p>

推定年代	K系	R系	G系	H系
II期 17世紀 中葉		 <p>32127-12</p>		
III期 17世紀 後葉～ 18世紀 前葉	 <p>3134上-32 36076-41</p>	 <p>36076-42</p>	 <p>3134上1-26</p>	 <p>36141-6</p>

第1表② 福井城跡出土カワラケ編年 (縮尺1/3)

加賀における近世成立期の土器様相

立原 秀明（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

石川県加賀の中・近世における土師器編年については、藤田邦雄氏（藤田1997）、滝川重徳氏（滝川1998）、柿田祐司氏（柿田2006）がまとめている。

今回は滝川1998と柿田2006の編年を基にして、加賀地域の16世紀後半以降について金沢城及び金沢城下町遺跡以外の様相を取り入れることを試みた。なお、土師器皿の分類はA類を在在地系とし、底部の形態により丸底と平底に分けた。B類は京都系で、その判断基準は能登地域を担当する岩瀬由美氏の分類に近いものと考えている。胎土の色調については、実見した資料のみ記述した。

編年概要

・15世紀

金沢市普正寺遺跡の中・上層面は15世紀前半に位置づけられる。これは集落の廃絶が文献資料にある嘉吉元年（1441）の砂丘移動によるものと推定されていることを時期比定の根拠としている。

遺構からの出土遺物は少ないが、遺構面に伴って土師器皿、青磁、白磁、瀬戸、珠洲などが出土している。土師器皿はA類のみが確認され、丸底で器壁が全体的に厚い。体部外側のヨコナデは強く明瞭な稜が形成される。

つづく15世紀中頃は小松市幸町遺跡（第2次）のSK1013を標識とする。鍛冶関連遺物とともに土師器皿、青磁、白磁、瀬戸、石製品などが出土している。土師器皿はA類のみが確認できる。底部は丸底・平底がともにみられる。大きさは大中小があり、法量の分化が進む段階である。

15世紀後半に位置づけられる加賀市勅使館跡のD2-2土坑は、土師器皿のみが陶磁器類を伴わずに出土している。県内におけるB類の出現期である。B類は大皿のみが確認され、深手で特に器壁が薄く、平底の底部から斜めに大きく開く体部で口縁端部を摘み上げる。

A類は中小があり、底部は丸底風と平底がある。器形は在在地系であるが、京都系に特徴的な調整痕とされる「の」字状のナデ上げがなされるものや、見込みに凸圏線状の調整痕がみられる中皿がある。小皿は器壁が厚く平底から体部が直に立ち上がるという特徴を有する。胎土はB類が白色系でA類は茶色系と明確に分かれる。

・16世紀

小松市銭畑遺跡の6号溝は16世紀前半に位置づけられる。共伴する陶磁器は少ない。土師器皿はA類とB類が確認できる。B類は大皿のみがみられ、前段階より器高の低下が指摘できようか。A類の丸底小皿は幸町遺跡につづくものである。

金沢市木越光琳寺遺跡の第9号溝は、掘り直しや埋め立てが行われているため遺物の一括性は低い。土師器皿はA類とB類があり、B類の法量は大小が確認できる。16世紀中頃として位置付けられる。

白山市鳥越城跡は遺物の一括性は高くないが、城が存続した時期が元亀元年（1570）から天正10年（1582）頃に限られることから、16世紀後半に位置づけた。A・B類ともに法量は大中小があり、平底で器壁は薄く体部が直線的に開き口縁端部を摘み上げるものが多い。A類はB類よりも器壁が厚く口縁部端を丸くおさめる。底部は平底が多数で、丸底は小皿のみに少数みられる。胎土は白色系と橙色系に分かれ、B類の胎土は前者が多いが、後者も少なからずみられる。

・17世紀

小松市小松城跡は元和元年（1615）の一国一条令で廃城となるが、寛永17年（1640）に三代藩主前田利常の隠居城となった。SK16からは土師器皿、見込に砂目を残す肥前陶器、中国磁器、瀬戸美濃が出土している。土師器皿の数は少ないが、体部が開き口縁端を摘み上げるB類が主体である。

小松市大川遺跡は遺物の一括性は高くないが、三代藩主前田利常が家督を光高に譲った寛永16年（1639）頃に城下町の整備が始まったことから、17世紀中頃に位置づけた。土師器皿、中国磁器、肥前陶磁器、越中瀬戸、石製品、木製品などが出土している。B類は底部が平底、体部は直線的に開き口縁端部を摘み上げる。小皿に胎土の精良なものがある。

加賀市八間道遺跡 N III SM-01 は、10層以上ある整地層の第3層で検出された落ち込みである。土師器皿、中国磁器、瀬戸美濃、肥前磁器、唐津、九谷、石製品、木製品が出土しており、同層から出土した磁器片の化学的分析から17世紀後半の年代が得られていることを時期比定の根拠としている。

土師器皿の法量は大中小あるが10cm前後の中皿が主体のようであり、大きくは平底で体部が直線的または外反するものと丸底風で内湾するものに分けられる。前者は外底面付近にヘラ削りを施したもの、底部に糸切痕を残すものがある。後者は基本的にヘラ削りをしない。前段階とのつながりがよくわからないタイプであり検討を要する。明確にB類と判断できる土師器皿は認められない。

まとめ

A類の丸底厚手の小皿は鳥越城跡の段階までは確認できる。編年図では抜けている箇所もあるが、平底は基本的にどの段階にもみられる器形と考えている。勅使館跡の平底厚手の小皿は体部が直に立ち上がる形態で前後段階でのつながりが追えない。同市分校C遺跡に類似例があることから、加賀市近辺にみられる様相の一つなのかもしれない。また、八間道遺跡の土師器皿も前段階とのつながりが不明である。研究集会において、福井城跡では17世紀中葉にロクロ成形、同後葉に型成形された土師器皿が出土することを聞き、八間道遺跡の平底のものはロクロ成形で丸底の土師器皿は型成形である可能性が高いのではないかと考えるに至った。どちらも油痕が付くことから灯明皿として使用されたものと推察されるが、同時期に製作方法が異なる土師器皿を使用する理由やその系譜についてはよくわからない。

加賀地域でのB類は勅使館跡の段階に出現し、大川遺跡の段階まで確認できる。ただし大川遺跡の資料は一括性を欠いており、加賀地域におけるB類の終息段階については課題を残した。法量は14cm前後の大皿が16世紀末頃まで、中小皿は16世紀前半頃から17世紀中頃までは確認できるようである。

おわりに

以上、加賀地域の土師器皿について編年案の作成を試みた。自身の不勉強によるところが大きいですが、一括性の高い良好な資料があまりなく、取り上げた地域も南加賀に片寄ってしまい、課題を多く残す結果となってしまった。今後、良好な資料により修正すべきものと考えている。

引用文献

藤田邦雄 1997 「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』桂書房

滝川重徳 1998 「加賀地域・金沢周辺の土師器皿 -15～17世紀-」資料

柿田祐司 2006 「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会

年代	藤田 1997期	在地系 (A)		京都系 (B)		
		丸底	平底			
1500	IV-II	普正寺遺跡上層面				
	V-I1	幸町遺跡 SK1013				
		勅使館跡 D2-2 土坑				
	V-I2	錢畑遺跡 6号溝				
1600	木越光琳寺遺跡 9号溝					
	鳥越城跡本丸					
1600	小松城跡 SK16					
	大川遺跡町屋敷					
	八間道遺跡 NIII SM-01					

※当日資料を縮小化するにあたり配置等を変更している。なお、土器実測図は各報告書より転載している。

0 (1:5) 10cm

加賀地域の土師器皿編年図 (案)

金沢城跡の土師器皿－16世紀後半～17世紀前半－

滝川 重徳（石川県金沢城調査研究所）

1. はじめに

金沢城跡は、金沢市街地のほぼ中央を占め、南東の山地帯より舌状に伸びる小立野台地の先端部分に立地する。前身は加賀一向一揆の拠点金沢御堂（金沢御坊）で、天正8年（1580）、織田政権の武将佐久間盛政の居城となるが、天正11年（1583）には前田利家が入り、以後近世を通じ、加賀藩前田家の本城となった。今回の主題である土師器皿を含め、1620年代以前の資料は決して多くはないが、城下町ではこの間の陶磁器・土師器皿の様相はより不鮮明で、今のところ、ある程度まとまった資料が認められるのは城とその周辺程度となっている。

2. 土師器皿の分類

1620年代以前の土師器皿の系統については、加賀地域の中世後半の状況を踏まえ、A：京都系土師器皿流入以前の在地型の系譜、B：京都系、C：京都系の退潮とともに出現した京都系的要素を持たない一群の3つに大別して捉えている〔石川県金沢城調査研究所2012・2014〕。

B類 平坦な底部から体部が斜め上方に開くこと、口縁端部に関し、内側に面を取る、あるいはつまみ上げるなどの、特徴的な造作があることを目安としている。また胎土の特徴等から、能登で生産された搬入品が含まれると考えている。

C類 京都系土師器皿の終末前後にのみ認められる一群を一括してC1類、後出的で17世紀前半以後に繋がる系統をC2類として区分した。

C1類 様々な形態を一括しており、体部が中折れ気味に強く立ち上がり、見込み周囲の凹線が比較的深く入るタイプ、全体に丸みを帯びた浅い皿状を呈し、見込み周囲に凹線を有するタイプ、これに類似するが、底部がより平坦となるタイプ等が見られる。

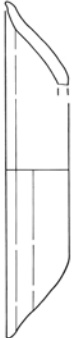
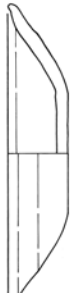

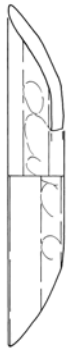

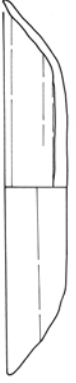

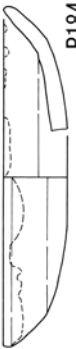
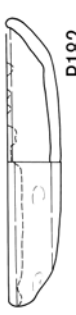







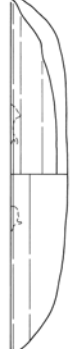
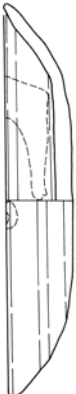
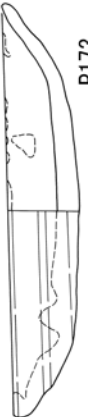

C2類 金沢城下町遺跡で一般に認められるもので、底部は平坦であり、体部の立ち上がりが急で口縁端が内屈気味となるI類、少数派で17世紀後半には見られなくなるII・III類がある。I類については、厚手の中・大型品を1、小型品を2と細分した（〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002b〕。この他、薄手の製品を3としたが、年代がやや下る）。また体部ナデに先行する見込み一方向条痕が見られるものをa、見込みから部分的に体部下半まで乱方向のナデが施されるものをbとしている（この場合、底部外面に蓆目状・板目状の圧痕が付くことが多い）。

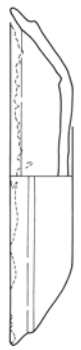




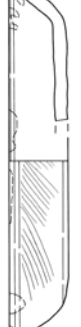

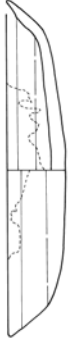


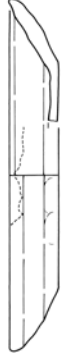

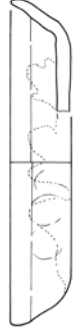

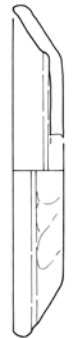




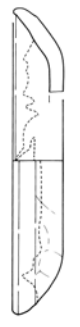
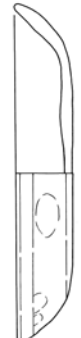

3. 土師器皿の変遷

変遷については、以下の通りI～Vの段階を考えている。

I 橋爪一ノ門下層整地土01〔以下、出典は図注記参照〕は、地山直上の最下層整地土中廃棄資料で、B類・推定能登産のみの構成で一括性が高く、儀礼行為を想起させる。丁寧な作りで口縁端部の伸び等に古相が窺えるとみて、前田家入城からさほど時を置かないもの（1580年代）と考えた。図示していないが、白鳥堀調査区下層〔石川県立埋蔵文化財センター1998〕・新丸第2次調査区下層〔石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター2002a〕の土師器皿は、B類が主体をなすもので（前者は在来とみられる少量のA類あり）、陶磁器全体の様相から16世紀後半としてIに含めて考えたが、遺物の中には1590年代に下るとされるものもあり、次のIIとの区別に課題を残している。

II 橋爪一ノ門下層SX02では、黄瀬戸、越中瀬戸大窯製品が共伴する。隣接する鶴ノ丸第2次調査

C類	
推定年代 I 1580年代	B類 [京都系] B類 (能登)  199701-D213 P244  199701-D220 P235 橋爪一ノ門下層 整地土 01
II 1590年代 1600年代	B類 (加賀)  199701-D191 P223 橋爪一ノ門下層 SX02  200001-D43 P24 鶴ノ丸第2次 SK3  199701-D271 P209  199701-D272 P210  199701-D277 P203 内堀橋北詰下層 SX01
III 1610年前後	C 1類  P184  P182  P187  P181  200704-D127 P206  200704-D129 P250  200704-D048 P242  200704-D128 P247  200704-D075 P229  200704-D131 P178 本丸附段 (2004-1) SK15  P172  P173  200704-D260 P166 河北門下層 SD007

<p>1610 年前後</p>	 <p>200005-D075 P157</p>  <p>200704-D098 P150</p> <p>河北門下層 SD006</p>	 <p>200704-D097 P151</p>	 <p>200704-D145 P132</p>  <p>200704-D150 P105</p>  <p>200704-D155 P134</p>  <p>200005-D077 P110</p>  <p>200005-D012 P143</p>  <p>200704-D149 P133</p>
<p>IV 1620 年前後</p>	 <p>199804-D067 P311</p>  <p>199804-D090 P320</p> <p>五十間長屋台下層 第VI面 SD01</p>	<p>C 2 (I 1) 類</p>  <p>199804-D073 P314</p>  <p>199804-D063 P318</p>  <p>199804-D089 P326</p>	 <p>199804-D068 P319</p>  <p>199804-D089 P326</p>
<p>V 1630 年前後</p>	<p>本丸附段 (2004-1) SK11</p>  <p>199804-D046 P268</p>  <p>199804-D053 P269</p>	 <p>P123</p>  <p>199804-D044 P267</p>	 <p>P138</p>  <p>199804-D045 P270</p> <p>五十間長屋台下層 第V面</p>

* 本丸附段 (2004-1) SK11・SK15: [石川県金沢城調査研究所 2008] 第 117・119 図

* 河北門下層 SD006・SD007: [石川県金沢城調査研究所 2011] 資料編第 223 ~ 228 図

* 鶴ノ丸第 2 次 SK3: [石川県金沢城調査研究所 2015] 第 101 図

* 他: [石川県金沢城調査研究所 2012] 第 58 ~ 61・64 図



[石川県金沢城調査研究所 2012] 第 176 図 一部改変

金沢城跡における土師器皿の変遷 (16C 後 ~ 17C 前)

区 SK2 出土資料も類似の組成であり、同一面で検出された付近の SK3 等も近い時期の所産と考えられる。土師器皿はほぼ B 類で占められる (SK3 出土資料を図示)。なお内堀橋北詰下層 SX01 は、土師器皿の形状・組成等に大きな違いはないが、肥前陶器鉄絵皿が 1 点伴出している。混入の可能性も考えられるが、どの遺構も遺物量自体少なく、共伴する陶磁器組成の安定性に関しては不安が残る。ここでは次の III との連続性も勘案し、II の推定年代を 1590～1600 年代とした。

III 肥前陶器の他、美濃陶器織部製品、軟質施釉陶器 (白化粧地に緑釉を流し掛けるもの) 等が共伴する。土師器皿の変化傾向を考慮して、推定年代を 1610 年前後としたが、陶磁器組成の点では次の IV とさほど変わらず、時期がなお下がる可能性もある。

本丸附段 (2004-1) SK15、河北門下層 SD007・006 等の出土資料によると、B 類は急速に減少する傾向が窺われる。一方で C 1 類が多数となるが、実態は様々な器形が並立する状況である。このうち、IV 以降の主体となる C 2 I 類に類似した器形もみられる。

IV 中国磁器漳州窯の粗製青花碗や、美濃陶器織部製品の中でも新しい傾向を持つタイプ等、大坂城下町の徳川初期 1 段階に特徴的なものが共伴する。

寛永 8 年 (1631) 造成の二ノ丸面から約 6 m 下位に位置する五十間長屋台下層第 VI 面 SD01 (溝状の採土坑群) では、土師器皿はわずかに B 類があるが、大半は C 2 I 類となる。

この段階から城下町の資料が多くなり、中でも広坂 1 丁目遺跡 II SX2013 [金沢市 (金沢市埋蔵文化財センター) 2006] では、C 2 I 類の土師器皿と元和 9 年 (1623) 銘の木簡が共伴し、IV の推定年代を 1620 年前後とする論拠の一つとなっている。なお C 2 I 1 類の見込み調整痕は a が主体である。

V 年代は寛永 8 年 (1631) の大火頃を想定している。本丸附段 (2004-1) SK11、五十間長屋台下層第 V 面等の出土資料によると、土師器皿は C 2 I 1 類が主体で、見込みの調整は b が増加する。

4. おわりに

15 世紀後半以来、加賀・能登に浸透した京都系土師器皿 (B 類) は、金沢地域において、1580～1600 年代は漸進的な変化傾向にあって土師器皿の主体を占めていたが、1610～20 年頃にかけて著しく退潮する。この間は、少数となった京都系を補完するように、多様な形状の土師器皿 (C 1 類) が形成されるが、短期間のうちに多様性は終息を迎え、その後は「金沢型」とも言うべき特定器形 (C 2 類) へ集約化されるという、極めて急激な形で推移した。この背景には、供給側の再編や土師器皿の機能の変容等、この時代の社会全体の動向と直結する変化が予測される。その実態の解明には、資料の一層の充実に加え、事象を読み解く方法論の整備が課題となる。

引用・参考文献

- 石川県金沢城調査研究所 2008 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書 I』
- 石川県金沢城調査研究所 2011 『金沢城跡 - 河北門 -』
- 石川県金沢城調査研究所 2012 『金沢城跡 - 二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓 II -』
- 石川県金沢城調査研究所 2014 『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書 II』
- 石川県金沢城調査研究所 2015 『金沢城跡 - 橋爪門 -』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002a 『金沢市 金沢城跡 I』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002b 『金沢市 木ノ新保遺跡』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『金沢城跡石川門前土橋 (通称石川橋) 発掘調査報告書 II』
- 金沢市 (金沢市埋蔵文化財センター) 2006 『石川県金沢市広坂遺跡 (1 丁目) III (近世編 1)』

能登における15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿の様相

岩瀬 由美（公益財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

能登における土師器皿の編年については四柳嘉章氏や柿田祐司氏の論考（四柳1987・1997、柿田2006）があるが、編年案が発表された後に調査・報告された資料を用いて編年の空白域を埋め、15世紀中葉～17世紀初頭までの編年試案を提示する。

2. 型式分類

在地系の手捏ね土師器をA類、京都系の手捏ね土師器をB類とする。A類は細分すれば丸底タイプと平底タイプがあるが、系譜を追えるほどの出土事例がない。B類はヘソ皿や深身のタイプなど形態による分類に加え、内底面の調整痕（凸圏線や凹線の有無）等で細分可能である。また京都系土師器皿に対する模倣が形骸化したものなども一型式として分離可能であるが、それら細分類については今後の課題とする。なお、事例が僅少であるものの、ロクロ土師器皿や体部外面をケズリ調整する土師器皿が15世紀代に確認されており、これらの分類についても今後の課題としたい。

3. 編年概要

比較的良好な土師器皿の出土資料を抽出してその土器様相から15世紀中葉から17世紀初頭の土師器皿の編年概要を記す。

15世紀中葉までは在地系A類で占められる。丸底タイプと平底タイプが七尾市小島西遺跡B区SK25出土資料により、16世紀前葉頃まで使用されているのは明らかであるが、それ以降の動向ははっきりしない。法量・形態変化が追えるほどに資料の蓄積がないが、厚手化している様相が見て取れる。

京都系のB類は15世紀後半（瀬戸・美濃焼大窯製品が共伴しない段階）から確認できる。穴水町桜町遺跡SK01や七尾市定林寺前遺跡第1次調査1号井戸では大・中・小の法量が揃い、小皿にはヘソ皿が確認される。次の段階は瀬戸・美濃焼大窯製品が共伴する15世紀末～16世紀初頭・前半で、穴水町白山橋遺跡方形堅穴配石遺構や東三階A遺跡第1次調査SD02資料を当てる。白山橋遺跡ではB類ヘソ皿がやや目立つと報告されているが、形態的には前段階と変化がなく、土師器皿単体での時期比定は難しい。東三階A遺跡資料については、内底面に比較的明瞭な凹線が確認できるため、時期が降る資料の可能性もあるが、小片であり、出土点数も少ないことから共伴遺物の年代観を採用した。

七尾市小島西遺跡B区SK25とG区SK373はA類やB類ヘソ皿を含まない後者が新しい様相を示すと判断し、前者を16世紀前葉、後者を16世紀中葉に置いた。土師器皿の形態変化は追えない。小島西遺跡G区SK373とほぼ併行する資料として16世紀第2四半期頃とされる七尾城跡シッケ地区遺跡資料を置いたが、小島西遺跡資料よりも厚手で、凹線が明瞭な個体が含まれるため後出的な印象を受ける。時期の異なる製品が混在している可能性もあろう。七尾城跡05（2005年能越自動車道関連調査 未報告）SK09はB類にヘソ皿を含むが、ヘソの造り出しが形骸化しており、内底面の凸圏線も殆ど確認できないことから小島西遺跡G区SK373より後出すると判断した。時期差ではなく遺跡間の差異の可能性も想定できるが、凹線は弱く、共伴陶磁器に七尾城跡05 SK09の方が若干新しいものが含まれることも判断材料の一つとした。七尾城跡05 SK27資料はSK09資料と大過ないが、やや厚手化傾向が見られる点、凹線が明瞭化する点、共伴陶磁器が16世紀後半を中心とした製品であることからSK09に

後出する資料に位置付けた。

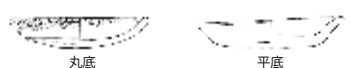
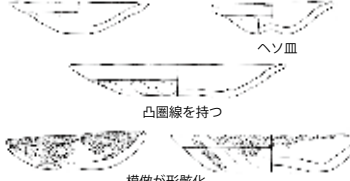
小島西遺跡E区 SK161資料は16世紀末以降のB類の一形態とみて大過ない。体部の立ち上がりが強く、他のB類とは形状に差があるが、口縁部をつまんでナデる造作は京都系に通じるものである。同B区 SD32資料は体部の開きが弱くなり、厚手化が顕著である。共伴資料から16世紀末～17世紀初頭頃に位置付けたが、16世紀後半とした七尾城跡05 SK27とはかなり形態差があるため、もう少し降る資料であるかもしれない。七尾城跡05 SK27との間をつなぐ資料の存在が想定される。七尾城跡05 SK27の次に編年されるべき、凹線が明瞭で厚手化した一群を七尾城跡08（2008年能越自動車道関連調査 未報告）出土資料に確認しているが、それでもなお小島西遺跡B区 SD32資料とは形態的に乖離している。

4. おわりに

これまで明らかになっていなかった能登の16世紀以降の土師器皿編年について、小島西遺跡出土資料、及び七尾城跡2005年出土資料を当てることで、15世紀中葉～17世紀初頭の編年案を補完した。B類の大きな流れとして、15世紀後半から17世紀初頭にかけての器壁の厚手化や器高の減少、模倣の形骸化等が指摘でき、凸圈線から凹線顕在化への流れも追うことができた。ただし、土師器皿を一個体として見た場合には明瞭な型式変化は追えず、全体的な出土傾向・乏しい共伴遺物からの編年観提示となった。また、資料が七尾市に偏在していることから能登全域に普遍的な様相と言えるのかどうかも現時点では不明である。今後は資料の増加を待ちつつ、切り合い関係のある遺構出土資料の精査や、共伴遺物の廃棄年代等も考慮した上での年代観の修正作業が必要となってくる。


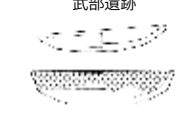
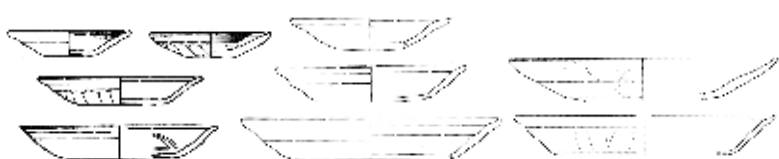
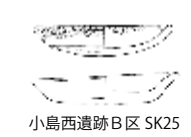
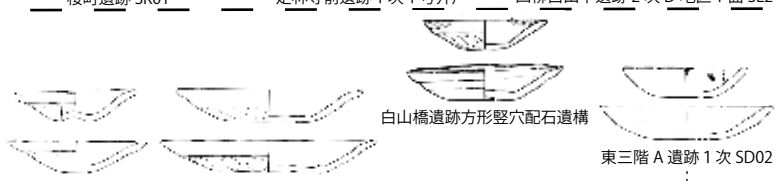


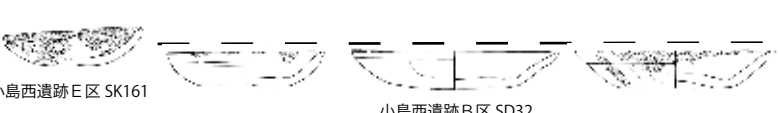
参考文献

- 穴水町教育委員会 1987 『西川島』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2008 『七尾市 小島西遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2009 『七尾市 東三階A遺跡』
- 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2005 『羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
- 柿田祐司 2006 「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸・美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 鹿島町 1996 『鹿島町史 資料編』
- 中島町教育委員会 1998 『定林寺前遺跡』
- 七尾市教育委員会 1992 『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』
- 四柳嘉章 1987 「中世土師器の編年」『西川島』穴水町教育委員会
- 四柳嘉章 1997 「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

A類 在地区系	<p>手握ねで、京都系土師器が入る以前から作られているものの系譜を引き、調整などに京都系土師器の影響が見られないもの。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・丸底と平底に細分可能 	
B類 京都系	<p>手握ねで、京都の土師器の形態・調整を模倣したもの。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体部は緩やかに開き、口縁端部をつまみ上げる、又は端部内面にナデによる面を形成する。外面は口縁付近のみをナデ調整する。 ・内面調整の結果、内底面に凸圈線・凹線が観察される個体がある。内面調整は小型品に「の」字状ナデ、中型品以上に「2」字状ナデを施すものがある。 ・小・中・大・特大の法量のみられる。小皿にはヘソ皿が含まれる。 ・模倣が形骸化したもののみられる。 <p>(今後細分が必要)</p>	

第1図 土師器皿型式分類

能登における15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿編年試案

年代	四柳編年 時期区分	在地区系 (A)	京都系 (B)
1450	III-3	 武部遺跡	
	IV-1	 谷内ブンガヤチ遺跡 10号井戸	 桜町遺跡 SK01 定林寺前遺跡 1次 1号井戸 四柳白山下遺跡 2次 D地区 I面 SE2
1500	IV-2	 小島西遺跡 B区 SK25	 小島西遺跡 B区 SK25 白山橋遺跡 方形整穴配石遺構 東三階 A遺跡 1次 SD02
	IV-3		 小島西遺跡 G区 SK373 七尾城跡 シッケ地区遺跡
1600			 七尾城跡 05 SK09(未報告資料) 七尾城跡 05 SK27(未報告資料)
			 小島西遺跡 E区 SK161 小島西遺跡 B区 SD32
			以後不明
			(七尾城跡 05 以外は参考文献より転載)

第2図 編年試案

富山県（富山城跡・富山城下町遺跡主要部）の様相

堀内 大介（富山市埋蔵文化財センター）


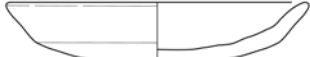
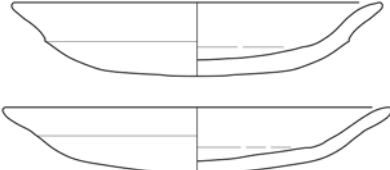
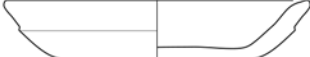
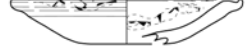

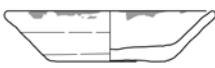
1. はじめに

近年富山市街地の再開発によって、富山城跡や富山城下町遺跡主要部において発掘調査が行われている。その中でも、平成26～28年度に富山城跡三ノ丸で行った総曲輪レガートスクエア整備に伴う発掘調査で、15世紀～19世紀までの遺構・遺物を確認したことから、中世から近世に至る状況を把握することが可能である。今回は、富山城跡（総曲輪レガートスクエア）出土品を中心に富山城跡・富山城下町遺跡主要部の遺物から15世紀～17世紀のカワラケについて検討する。

<富山城跡の時期区分>

- 14C?～1543頃 荘園富山郷期
- 1543頃～1605 中世富山城期
- 1560 神保長職自焼没落
- 1585 佐々成政降伏、城破却
- 1605～1660 慶長期富山城期
- 1609 慶長の大火
- 1640～1660 富山藩借城
- 1661～19C 藩政期富山城期

2. カワラケの器種分類

非 ロ ク ロ	A類		<ul style="list-style-type: none"> ・口縁端部に一段のヨコナデを施す ・底部は丸底、平底の両者がある 			
	B類				<ul style="list-style-type: none"> ・底部から口縁部が直接外反 ・底部と口縁部の境にヨコナデによる稜をもつ ・底部は平底である 	
	C類 (京都系)	1	<ul style="list-style-type: none"> ・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部はヨコナデして外反 ・ヨコナデの強いもの、弱いものがある ・口縁端部は丸く納めるもの、つまみ上げるものがある ・細分の余地が大きい 			
		2			<ul style="list-style-type: none"> ・体部が開き気味に立ち上がる ・口縁部はヨコナデして短く外反 ・ヨコナデの強いもの、弱いものがある 	
		3				
(能登系)		胎土に海綿骨針が混じる				
ロ ク ロ	RA類		<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部はヨコナデして外反 ・底面および体部下半に回転ヘラケズリ 			
	RB類				・底部回転糸切り	

0 10cm

3. カワラケの変遷

富山城跡における非ロクロのカワラケの編年が、第1図である。ここでは、各時期の器形の変化について、みていく。

15世紀代は、主にA類と京都系C1類が存在し、少量のB類がある。

16世紀初頭～前半にはB類は存在しなくなるようで、A類と京都系C1類・C2類となる。C1類は明瞭な稜が出来る程強くヨコナデして外反するものが出現し、その中から口縁部が短く外反するC2類が派生する。C1類には口縁端部をつまみ上げるものが増える。16世紀中頃～17世紀前半までは16世紀前半と同じ器形が継続するが、16世紀後半からはC1類・C2類のヨコナデは緩やかになる傾向にある。16世紀後半になると、口縁部内面に端面を形成するC3類が出現する。

17世紀中頃には、A類・C2類は存在しなくなるようで、京都系のみとなる。この時期のC3類の器形は、金沢城で出土する箱型と呼ばれる器形と類似しており、前田利次が富山城を仮住まいとした借城期に当たることから、金沢の影響が強く表れているのかもしれない。17世紀後半～18世紀前半には、底部が丸底化する。この器形変化も金沢での器形変化と類似している。

図は表示していないが、胎土に海綿骨針が混じる能登系土師器はほぼ全時期を通して、ごく少量確認できる。また、ロクロ土師器が15世紀後半に確認できる。

4. おわりに

第1図で非ロクロのワカラケの編年を示したが、特に京都系土師器C類の細分化や内底面の圏線の有無などの製作技法に関する事、法量や用途に関する事など多くの検討課題が残ったため、改めて検討したい。

参考文献

- 越前慎子1996「梅原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』富山県文化振興財団
- 高梨清志2006「富山県の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 富山市教育委員会2004『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会2009『富山城跡試掘確認調査報告書』
- 富山市教育委員会2015『富山城跡 富山城下町遺跡主要部発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告79
- 富山市教育委員会2016『富山城跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告81
- 富山市教育委員会2017『富山城跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告87
- 富山市教育委員会2018『富山城跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告93
- 堀内大介2017「近世土師器皿・越中瀬戸素焼皿の集成 ～富山城跡・富山城下町遺跡主要部の出土遺物から～」『富山市考古資料館紀要』第36号 富山市考古資料館
- 宮田進一1992「越中における中世土師器の編年」『中世前期の土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
- 宮田進一1997「越中における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
- 森 隆2003「富山県の中世土器（資料編）」『富山考古学研究』第6号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所
- 森 隆2005「富山県の中世土器（資料編2）」『富山考古学研究』第8号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所

宮田 1997 年代	A類 [29]	C3類 [30]	C1類 [31]
宮田VI-3	C類 [32]	[34]	[35]
16 C 末 & 17 C 初頭	C2類 [33]	[36]	[36]
	[37]	[38]	[39]
			[42]
17 C 前半		[40]	[43]
		[41]	[43]
			[44]
17 C 中頃		[44]	[45]
		[46]	[46]
		[47]	[48]
17 C 後半		[47]	[49]
		[50]	[50]
		[51]	[53]
18 C 前半		[52]	[52]

宮田 1997 年代	A類 [1]	B類 [2]	C1類 [3]
宮田IV-3	[4]	[5]	[6]
15 C 前半 & 中頃	[7]	[8]	[9]
宮田V	[10]	[11]	[11]
15 C 後半	[12]	[14]	[16]
	[13]	[15]	[17]
宮田VI-1	[18]	[20]	[21]
16 C 初頭 & 前半	[19]	[22]	[22]
	[23]	[25]	[27]
16 C 中頃	[24]	[26]	[26]
			[28]
宮田VI-2			[28]
16 C 後半			[28]

第1図 カワラケ編年図

※[]内は本図通し番号



資料検討会

報告の後、北陸3県の出土資料を持ち寄り、検討会を同会場で約1時間（15:20～14:20）行った。検討会に先立ち、各報告者の遺物説明があり、参加者は各県の特徴を把握したうえで、検討会に移った。福井城跡出土資料、金沢城跡出土資料、富山城跡出土資料、県内出土資料を中心に遺物を見ながら活発な意見交換がなされた。

いわゆる京都系カワラケの出自、福井城跡に見られる把手をつけた灯明皿の受皿の系譜、素焼きの越中瀬戸の存在など興味は尽きなかった。

今回の研究集会を基礎研究とし、来年度にこの成果を踏まえ、編年研究を主眼とした研究集会を開催する予定である。（白田義彦）



阿部講師の遺物解説



中原講師の遺物解説



立原講師の遺物解説



滝川講師の遺物解説



岩瀬講師の遺物解説



堀内講師の遺物解説

小松市園町遺跡と大領遺跡における自然科学分析

能城修一（明治大学黒耀石研究センター）、山本直人（名古屋大学人文学研究科）、
小岩直人（弘前大学教育学部）、安中哲徳・増永佑介・白田義彦（（公財）石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

現在、小松市により北陸新幹線建設に伴うボーリング試料、小松市内の既存ボーリング試料、小松市が新たに実施したボーリング調査などの検討により、小松市内の地形発達や環境の変遷、遺跡の立地について分析が行われている。それによると、実施中の地質の調査・分析では、内陸部の沿岸州（砂州・浜堤）が約7,000～5,300年前頃に形成された可能性が指摘されている。

平成29年度に（公財）石川県埋蔵文化財センターが、北陸新幹線建設に伴い小松市内で実施した園町遺跡と大領遺跡の発掘調査の際に、小松市による関連調査として、両遺跡の遺跡基盤層となる砂層から出土した自然木片の樹種同定や炭素14年代測定、砂層の粒度分析などの自然科学分析が行われたことから、今回その成果について報告する。

なお、編集は安中・白田が実施したが、文責は各本文末の（ ）内に記名した執筆者に属する。

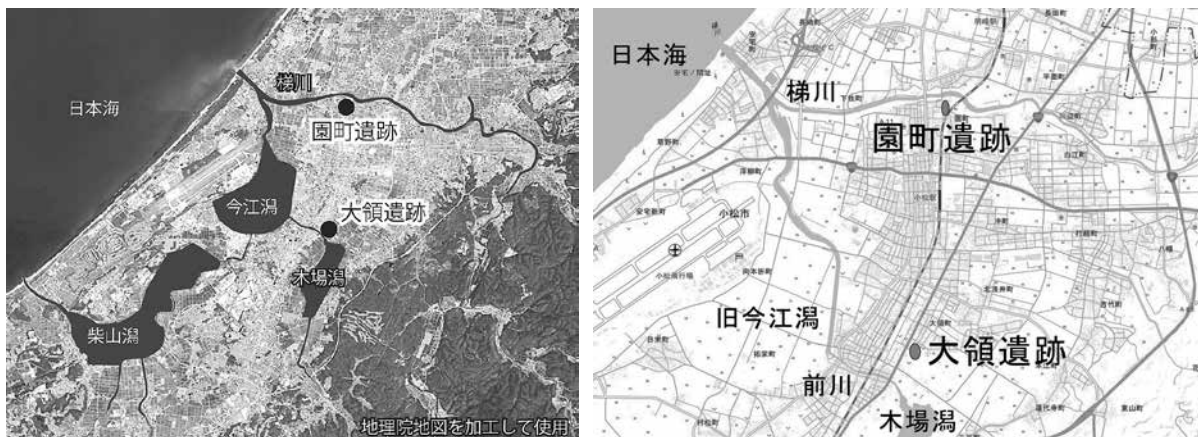


図1・2 園町遺跡と大領遺跡の位置（地理院地図を加工して使用）

（1）園町遺跡の概要

園町遺跡は、梯川左岸より南に約150mの小松市園町に所在し（図1・2）、北陸新幹線建設（加賀・敦賀間）に伴う試掘調査で新たに確認された遺跡で、今回、初めて発掘調査が実施された。

遺跡は、北側に梯川が流れ、南西側に今江潟が所在し、調査によって標高約1.2～1.4mの砂層に立地していることを確認した。その成り立ちは複雑

であり、梯川の堆積作用によるものなのか、縄文海進により形成された沿岸洲（浜堤列）の伸びの一部なのかははっきりしない。そのため、今回、基盤層となる砂層から出土した自然木の自然科学分析を行った結果は、遺跡の立地を考える上で参考となる。

調査の結果、弥生時代中期の環濠集落と墓域、中世の集落を確認した。弥生時代の遺構は、環濠、溝、

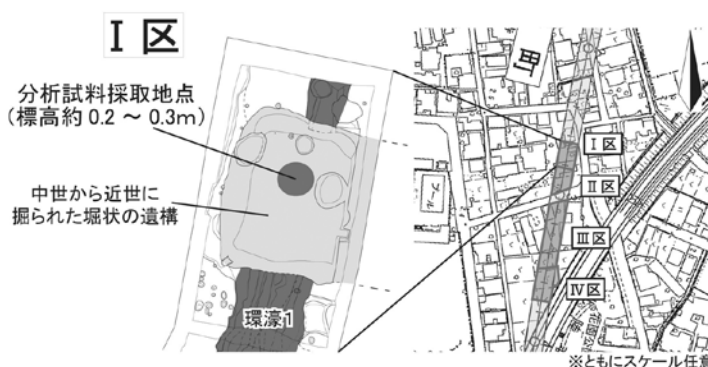


図3 園町遺跡分析試料採取地点図

方形周溝墓群を検出し、中世の遺構は、掘立柱建物、竪穴建物、井戸、溝などを検出した。

そのうち、分析試料の採集地点は、I区の中世から近世に掘られた堀状の遺構下の基盤層（砂層）である（図3）。この遺構は、幅約9m、延長約8m、深さ約1.3～1.4m（底標高約0.25m）で、東に向かって調査区の外へ伸びる。また、弥生時代中期の環濠1を切って掘られていた。I区の基本層序を概観すると、地表面が標高約2.3mで、宅地造成土が層厚約0.6mを測り、その下に中世面となる遺物包含層が層厚約0.2mを測る。堀状の遺構は、この層から深さ約1.3～1.4m掘り込まれていた。遺物包含層の下には、基盤層1（灰黄色から黄橙色の砂層）があり、層厚約1.2mを測る。I区の環濠1は、基盤層1から深さ約1m掘り込まれていた。そして、基盤層1より下は、基盤層2（じわじわと湧水し植物依存体を豊富に含む、やや暗い緑灰色の砂層）が標高約0.2～0.3mから下に堆積する。基盤層2は今回の調査で確認された最下層であり、この層から出土した自然木が分析試料として採取された。

（増永佑介）



写真1 園町遺跡上空から見た小松駅方向（北から）



写真2 大領遺跡上空から見た小松駅方向（南から）

（2）大領遺跡の概要

大領遺跡は、木場潟の北側約500mの小松市大領町と今江町の境に所在（図1・2）し、北陸新幹線建設（金沢・敦賀間）に伴い、今回初めて発掘調査が実施された。

遺跡は、南西側の粟津駅方向から北側の小松駅方向にゆるやかに屈曲しながら伸びる砂丘上の東側縁辺部、現在の海岸線からは約5km内陸部の標高1～2m代に立地（写真2）している。遺跡の西側には干拓事業により農地化した今江潟と前川、南側には木場潟、北側には一級河川の梯川が存在し、水上交通の要衝に位置している。また、現在も国道やJR北陸本線、建設中の北陸新幹線が通る陸上交通の要衝の地でもあり、遺跡周辺は南加賀地域における古代・中世の水上および陸上交通路の結節点付近に位置している。

調査の結果、古代と中世（鎌倉・室町時代）のどちらも両側に側溝を持つ2つの道路遺構を約30m離れた場所（写真5）で確認した。道路の路面は後世の耕地整理により削平されていたが、3区で検出した古代の道路遺構は路面幅約8mで、奈良時代には古代北陸道であった可能性がある。1区で検出した中世の道路遺構は路面幅約7mを測る。出土遺物からは、古代の道路遺構は、9世紀初頭頃、中世の道路遺構は、16世紀後半頃には機能していたと考えられる。

また、古代～中世とみられる畝溝や近世以降の水路状の溝などを検出したことから、当時周辺には、畑や水田などの生産域が広がっていたと考えられる。

大領遺跡からは、他にも縄文時代後期（約3,000～4,000年前）頃の土器（写真6）や石器などが

出土していることから、周辺に縄文時代の集落が存在していた可能性がある。今回の自然科学分析では、2区で縄文土器が出土した地点（標高2.15m）の南側基盤層（砂層）にトレンチを掘削し、断面から砂の試料と標高1.0m付近から炭化木片の試料が採取された。（安中哲徳）

1. 園町遺跡から出土した自然木の樹種

園町遺跡のI区堀状の遺構下の基盤層となる砂層から出土した自然木9点の樹種を報告する。

樹種同定は片刃カミソリで横断面と、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール50g, アラビアゴム粉末40g, グリセリン20ml, 蒸留水50mlの混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはKYJ-2183～2191の番号を付して標本番号とした。標本は明治大学黒耀石研究センターに保管されている。

総数11点の試料中には、針葉樹1分類群、広葉樹7分類群が見いだされ、アスナロが2点であったほかは、すべて1点ずつであった（図4・5）。

1. アスナロ *Thujaopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図4：1a-1c（枝・幹材, KYJ-2186）

垂直・水平樹脂道とともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量はやや多い。早材の後半に樹脂細胞が散在する。分野壁孔は小型のヒノキ型で1分野に1～2個。

2. フジ属 *Wisteria* マメ科 図4：2a-2c（枝・幹材, KYJ-2191）

年輪の始めに中型で丸い孤立道管が散在し、晩材では小型で疎らな孤立道管を挟むように小道管が帯をなす半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の2列ほどが直立する異性で3細胞幅位。小道管要素と小型放射組織、柔細胞ストランドは層階状に配列。

3. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図4：3a-3c（枝・幹材, KYJ-2183）

ごく大型で丸い孤立道管が年輪の始めに1列に配列し、晩材では急に小型化した小道管が接線方向～斜め方向にのびる塊をなして散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1列が直立する異性で6細胞幅位、直立部と周縁部にはしばしば大型の菱形結晶を持つ。

4. ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. アサ科 図4：4a-4c（枝・幹材, KYJ-2184）

やや大型～小型で丸い厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で翼状～連合翼状。放射組織は上下端の1～3列が直立する異性で4細胞幅位、直立部にしばしば小型の菱形結晶をもつ。

5. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図5：5a-5c（枝・幹材, KYJ-2185）

やや大型で丸い孤立道管が年輪の始めに1列に配列し、晩材でやや急に小型化した小道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと複合状で大型のものとなる。

6. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothyrsus* カバノキ科 図5：6a-6c（枝・幹材, KYJ-2188）

小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は20～30段ほどの階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと集合状で大型のものとなる。

7. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図5：7a-7c (枝・幹材, KYJ-2190)

小型で丸い道管が単独あるいは時に放射方向に2個複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性で、道管との壁孔は大きく密に配列する。

8. 散孔材 Diffuse-porous wood 図5：8a-8c (枝・幹材, KYJ-2189)

ごく小型の孤立道管が疎らに散在する散孔材。当年輪しかない。道管の穿孔は40段ほどの階段状。放射組織は上下端の5列ほどが直立する異性で2細胞幅。

(能城修一)

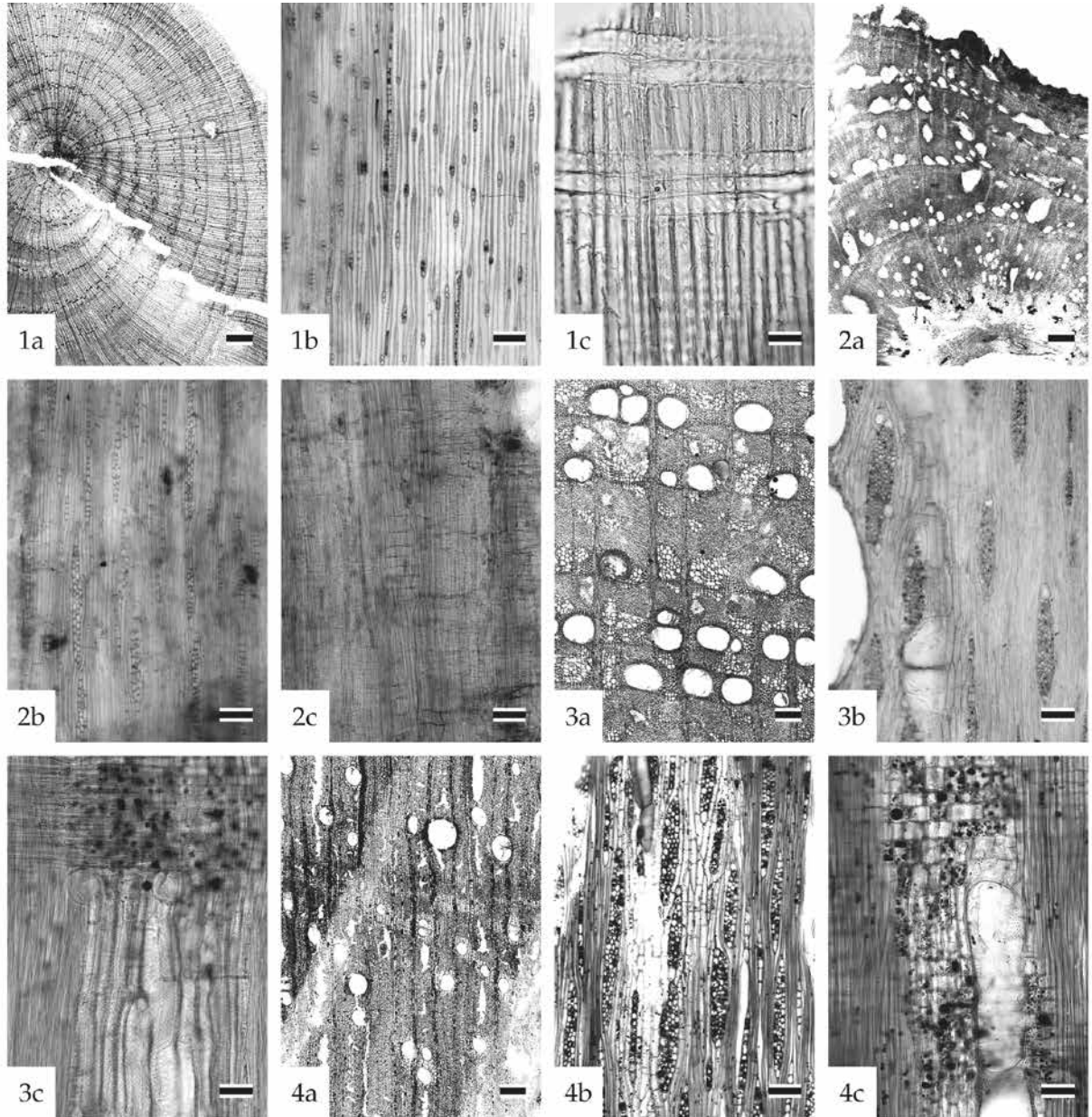


図4 園町遺跡から出土した自然木の顕微鏡写真(1)

1a-1c：アスナロ (枝・幹材, KYJ-2186), 2a-2c：フジ属 (枝・幹材, KYJ-2191), 3a-3c：ケヤキ (枝・幹材, KYJ-2183), 4a-4c：ムクノキ (枝・幹材, KYJ-2184). a：横断面 (スケール=200 μ m), b：接線断面 (スケール=100 μ m), c：放射断面 (スケール=25(1c), 50 μ m).

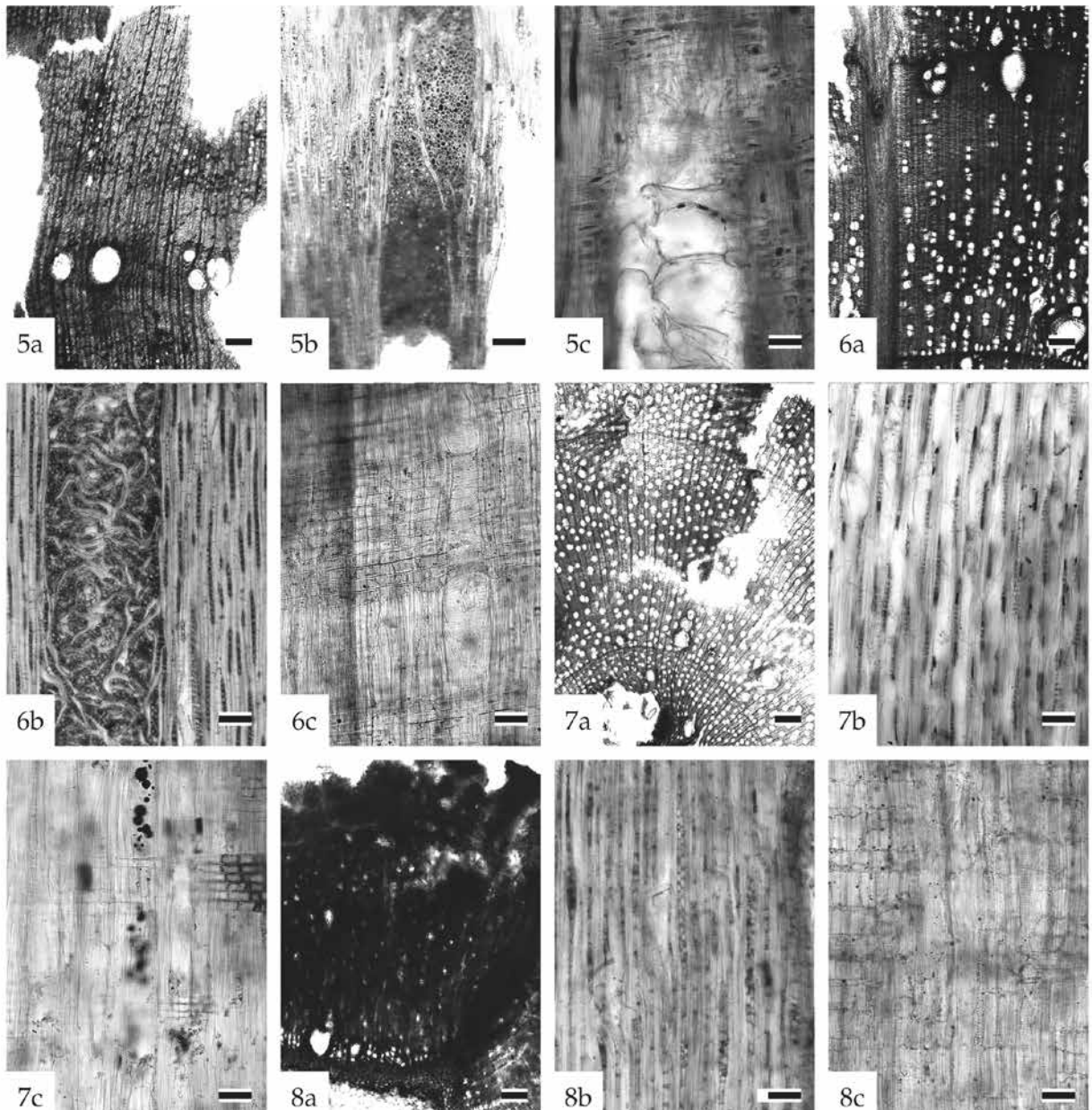


図5 園町遺跡から出土した自然木の顕微鏡写真（2）

5a-5c：コナラ属コナラ節（枝・幹材，KYJ-2185），6a：ハンノキ属ハンノキ節（枝・幹材，KYJ-2188），6b-6c：ハンノキ属ハンノキ節（枝・幹材，KYJ-2188），7a-7c：ヤナギ属（枝・幹材，KYJ-2190），8a-8c：散孔材（枝・幹材，KYJ-2189）。a：横断面（スケール=200 μ m），b：接線断面（スケール=100 μ m），c：放射断面（スケール=50 μ m）。

2. 環濠下砂層出土自然木の炭素14年代測定

（1）測定の目的と試料

園町遺跡が立地する沿岸州の形成時期を検討するために、I区で検出された弥生時代中期の環濠1をきって中世から近世にほられた堀状の遺構下の砂層から出土した自然木1点と小さな木片2点の合計3点の炭素14年代測定をおこなった。測定は株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。木片2点は調査区内で地点を少しずつかえながら湧水のある砂層中から採取した（写真3・4）。



写真3 園町遺跡木片試料採取調査区（I区）



写真4 園町遺跡木片試料採取状況

能城修一氏が実施した自然木同定の試料番号との関係では、KYJ-2183（ケヤキ）が17SNM01、KYJ-2184（ムクノキ）が17SNM02、KYJ-2185（コナラ属コナラ節）が17SNM03と一致する。

（2）測定の結果

株式会社パレオ・ラボから提出された測定結果は表1のとおりである。なお、暦年較正にあたってはOxCal4.3（IntCal13）が使用されている。

表1 園町遺跡出土木片の炭素14年代測定結果一覧表

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34719 試料 No.17SNM01	-29.01 \pm 0.24	4521 \pm 26	4520 \pm 25	3350-3323 cal BC (13.4%) 3234-3172 cal BC (30.8%) 3163-3117 cal BC (23.9%)	3355-3264 cal BC (30.8%) 3241-3103 cal BC (64.6%)
PLD-34720 試料 No.17SNM02	-28.37 \pm 0.17	4461 \pm 22	4460 \pm 20	3321-3272 cal BC (23.0%) 3267-3235 cal BC (19.5%) 3170-3164 cal BC (2.6%) 3115-3089 cal BC (13.3%) 3056-3031 cal BC (9.8%)	3331-3214 cal BC (53.5%) 3187-3155 cal BC (8.5%) 3129-3081 cal BC (18.9%) 3070-3026 cal BC (14.5%)
PLD-34721 試料 No.17SNM03	-26.63 \pm 0.25	4522 \pm 26	4520 \pm 25	3350-3323 cal BC (13.7%) 3234-3172 cal BC (30.7%) 3163-3117 cal BC (23.9%)	3355-3264 cal BC (30.8%) 3241-3103 cal BC (64.6%)

（3）若干の考察

17SNM01（PLD-34719）と17SNM03（PLD-34721）の炭素14年代はほぼ一致しており、その較正年代は3,355～3,103 cal BCである。両者よりも17SNM02（PLD-34720）の炭素14年代はわずかに新しく、較正年代も3,331～3,026 cal BCとなっている。これらと小林謙一氏が提示している土器型式編年の較正年代（小林2017）をくらべると、3点の較正年代は北陸の土器型式編年では縄文時代中期前葉の新崎式から中葉の上山田式に相当すると判断できる。

樹種同定によって明らかにされた落葉広葉樹は塩基性にすぐれているものではないことや、木片が採取された堀状の遺構下の砂層は淘汰の悪い砂層であることから、試料にした木片群は河川による堆積であると考えている（高橋・小岩ほか2018）。また、園町遺跡が立地する沿岸州は約7,000年前に

形成がはじまり、中期前半の5,300～5,000年前には沿岸州の形成は終了していると推測している。

同じ沿岸州に立地する八日市地方遺跡からは後期中葉から晩期前半の縄文土器片が出土しており(宮田2003)、少なくとも後期中葉の馬替式期(約1,900～1,700 cal BC)には縄文時代の人々が沿岸州および周辺地域を利用しはじめていたと考えることができる。(山本直人)

引用文献

小林謙一 2017 『縄文時代の実年代』 同成社：東京

高橋未央・小岩直人・山本直人・榎田誠・能城修一・高橋大樹 2018 「小松平野における沿岸州の形成年代に関する検討」

『日本地理学会発表要旨集』2018年春季学術大会 東京学芸大学：小金井

宮田 明 2003 「第1章 第1節 縄文土器」『八日市地方遺跡Ⅰ』 1～12頁 石川県小松市教育委員会：小松

3. 沿岸州を構成する堆積物の炭素14年代測定

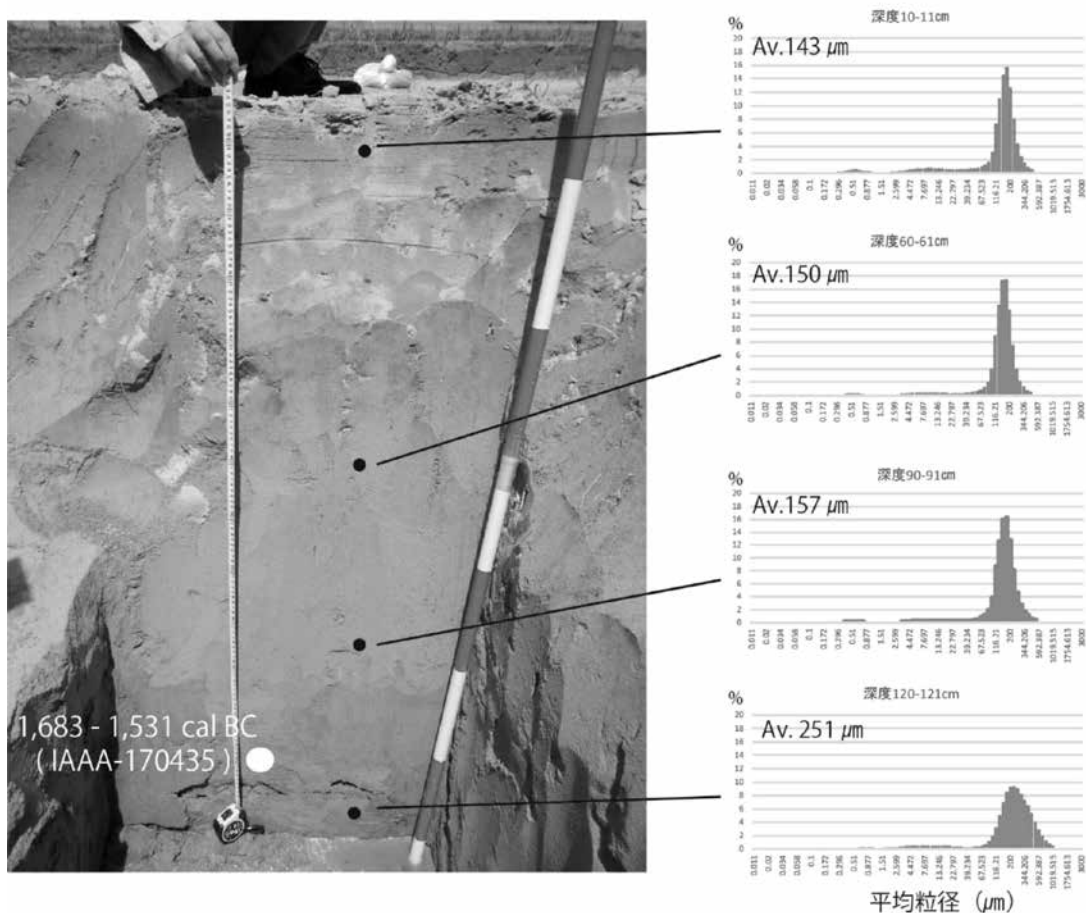


図6 大領遺跡におけるトレンチ断面、粒度組成、炭素14年代測定試料採取位置

小松市周辺の地形は、形態や発達状況、地形面の連続性等により、東から丘陵地(能美・江沼丘陵)、台地(月津台地、柴山台地)、能美低地(後背湿地、自然堤防、沿岸州Ⅰ、沿岸州Ⅱ・Ⅲ)に区分することができる。大領遺跡は、北東-南西方向に発達する沿岸州Ⅰの東縁部、後背地低の境界付近に位置している。北陸新幹線の工事に伴うボーリング資料では、大領遺跡周辺の沿岸州Ⅰは、標高約-10m以浅に細砂を主体とする砂層がみられる。

今回、大領遺跡の調査区南部に位置する2区（写真5）の東壁面付近で掘削されたトレンチの断面を観察する機会を得た。ここでは、地表面（トレンチの最上部の標高は2.15m）から深さ約130cmまでの細粒砂～中粒砂を主体とする堆積物を観察することができた（図6）。

堆積物の特徴を明らかにするため、トレンチ西壁において砂層のサンプリングを行い、それらをレーザー回折式粒度分布測定装置（Particle Size Distribution Analyzer LA-950（株）堀場製作所製、測定粒子径範囲は0.01～3000 μ m）を使用して粒度分析を行った（図6）。その結果、表層から深度90cmまでは、平均粒径140～160 μ m極めて淘汰のよい細粒砂からなっていることが示された。このような特徴から表層付近の堆積物は砂丘砂である可能性が高い。また、深度120cm以深では、平均粒径が約250 μ mと大きくなり、淘汰も若干悪くなる砂層からなる。今回の発掘では、砂丘砂下部とその下位の細～中粒砂層との遷移帯である深度115cm（標高1.0m）付近に炭化木片がみられ、そのAMSによる炭素14年代測定を実施した。その結果、1,658-1,647 cal BC（1 σ ）、1,683-1,531 cal BC（2 σ ）という約3,600～3,500年前の年代値が得られた（IAAA-170435:図6）。（小岩直人）



写真5 大領遺跡 分析試料採取地点



写真6 試料採取地点北側の砂層上面から出土した縄文時代後期頃の土器

石川県埋蔵文化財情報

第 39 号

発行日 2018（平成30）年5月31日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.jp>

E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 (株)ハクイ印刷

© (公財) 石川県埋蔵文化財センター